

前 側 遺 跡

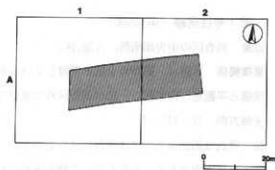
第6章 前側遺跡

第1節 遺跡の概要

前側遺跡は、後側遺跡から西に約500m離れた上入野台地の西部に位置する。調査面積は361㎡で、現況は畑地である。

当遺跡は、奈良・平安時代の遺跡である。今回の調査で確認した遺構は、奈良・平安時代の堅穴住居跡4軒、掘立柱建物跡4棟及び土坑9基である。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)で13箱出土している。主な遺物は、奈良・平安時代の甕、甌、甗、高台付甗、甗及び蓋等の土師器並びに須恵器類で、その他住居の建築材として使われたと思われるほぞ穴をもつ炭化材や磁石等が出土している。



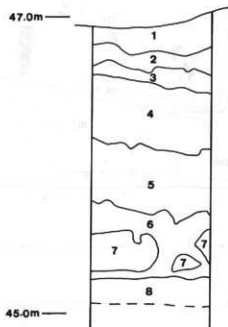
第167図 前側遺跡調査区設定図

第2節 基本層序

前側遺跡の調査区中央部北側、Alii区にテストピットを設定し確認面から2m掘り下げ、土層の堆積状況を観察した。

- 1層 黒褐色土層。ローム粒子を微量含む。粘性が弱く、締まりがない。厚さ10~50cm。
- 2層 にぶい赤褐色のローム土層。赤色スコリア、黒色土を少量、ローム粒子を中量含む。粘性は弱く、締まりは普通。厚さ8~24cm。
- 3層 褐色ローム土層。粘性、締まりともに普通。厚さ6~14cm。
- 4層 赤褐色ローム土層。粘性、締まりともに普通。厚さ25~45cm。
- 5層 褐色ローム土層。粘性は普通だが硬く締まっている。厚さ40~60cm。
- 6層 黄褐色ローム土層。Ag-KPを少量含む。粘性が強く、硬く締まっている。厚さ20~50cm。
- 7層 ブロック状に堆積する黄褐色のローム土層。粘性は弱い硬く締まっている。厚さ10~28cm。
- 8層 褐色ローム土層。粘性は普通だが硬く締まっている。確認された厚さ10~20cm。

上下の層序及びその含有物や土質を上入野遺跡、青木遺跡及び後側遺跡の層序と比較すると、2層は今市・七本桜層に、4層は立川ローム層の第I黒色帯に、5層は立川ローム



第168図 前側遺跡基本土層図

層の第Ⅱ黒色帯に、6層は赤城・鹿沼軽石層に相当すると考えられる。当遺跡の遺構は、2層の上面で確認した。

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居跡

今回の調査では、奈良・平安時代の竪穴住居跡4軒を確認した(SI-1~4)。以下、遺構番号順に記載する。

第1号住居跡 (第169図)

位置 調査区の中央部南側、A2g区。

重複関係 本跡は、第10号土坑と重複しているが、本跡が第10号土坑に掘り込まれており、本跡が古い。

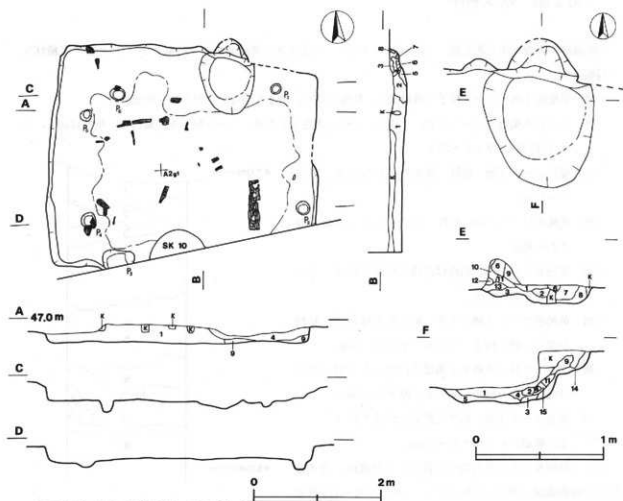
規模と平面形 南東側の一部が調査区外に延びているが、長軸4.2m、短軸3.5mの長方形と推定される。

主軸方向 N-11°-E

壁 壁高は約25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。

ピット 6か所(P₁~P₆)。P₁、P₂、P₃~P₆は径15~25cmの円形で、深さは8~18cmである。P₁は調査区外に延びているため平面形は不明であるが深さは15cmである。いずれも柱穴としては小規模であり、性格は



第169図 第1号住居跡・竪穴測図

不明である。

竈 北壁東寄りに付設されている。耕作による擾乱のため煙道部と火床部を残すのみで、正確な形態は不明である。火床部は掘りくぼめられており、煙道部は壁外に約25cm突出し、壁の部分で段を有す。覆土は15層からなる。七層5、8は掘り方覆土と考えられる。

覆土層解説

| | | | |
|--------|----------------------------|---------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化粒子・ローム粒子多量、焼土粒子中量、白色粒子微量 | 8 黄褐色 | ロームブロック多量 |
| 2 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子中量、炭化粒子少量、白色粒子微量 | 9 極暗赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子中量、白色粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量 | 10 黒褐色 | 焼土粒子多量、粘土ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量 | 11 黒褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子中量、粘土ブロック少量 |
| 5 暗赤褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 12 淡黄色 | 粘土ブロック層、焼土粒子微量 |
| 6 明赤褐色 | 焼土粒子多量、ローム粒子中量、炭化粒子微量 | 13 暗褐色 | ローム粒子・粘土粒子中量、焼土粒子微量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量、白色粒子微量 | 14 暗褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |
| | | 15 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子少量 |

覆土 9層からなる。覆土にロームブロックが含まれていることや堆積状況が自然堆積の状況と異なることから人為堆積と考えられる。

土層解説

| | | | |
|-------|------------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化材多量、ローム粒子中量、焼土粒子・ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子中量、焼土ブロック・ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 | 8 黒褐色 | 焼土ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | 9 黒褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量 |
| 5 暗褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量、焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物 土師器片27点、須臾器片8点、粘土塊6点及び炭化材が多量に出土している。出土土器は細片のみである。炭化材のうち南東部の床面からはほぞ穴をもつ大形材が出土している。現状で長さ約77cm、幅約17cm、厚さ約5cmの角材とみられる。ほぞ穴は23cm離れて2か所あり、いずれも長軸10cm、短軸6cmの長方形で材を貫通している。

所見 本跡は、床面からほぞ穴をもつ炭化材をはじめとして多くの炭化物が出土していることから焼失家屋と考えられる。ほぞ穴をもつ炭化材については樹種同定を行ったところクスノキの一種と判明した(付参参照)。その他の遺物は土器の細片のみで、生活財を焼失前に徹底的に持ち出したものとみられる。出土土器が細片であるため詳細な時期については不明であるが、奈良・平安時代の住居跡とみられる。

第2号住居跡(第170図)

位置 調査区の中央部北側、A2e区。

重複関係 本跡は、第2号掘立柱建物跡と重複しているが、本跡が第2号掘立柱建物跡に掘り込まれており、本跡が古い。

規模と平面形 北側の大部分が調査区外に延びているため正確な規模や平面形は不明であるが、一辺4.3mの方形か長方形と推定される。

主軸方向 [N-2°-E]

壁 壁高は約35cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

床 ほぼ平坦である。中央部が踏み固められている。

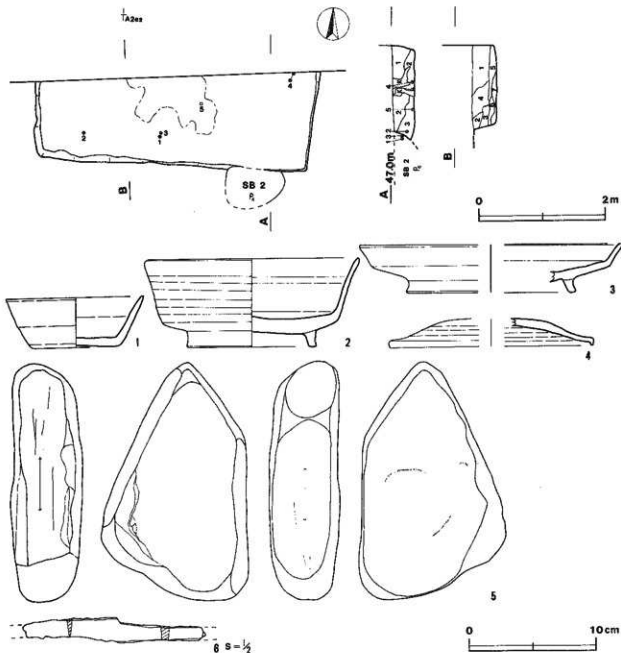
覆土 7層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量
- 7 黒褐色 ロームブロック少量、ローム粒子微量

遺物 土師器片32点、須恵器片43点、粘土塊5点、砥石1点及び刀子1点が出土している。第170図4の蓋は東壁際の覆土下層から、5の砥石は中央部の床面から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から奈良・平安時代（9世紀前半）の住居跡と考えられる。



第170図 第2号住居跡・出土物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|-------------|----------|---|-----------------------------|--------------------------------|---------|
| 第170図 1 | 環 須恵器 | A 10.8 | 口縁部一部欠損。平底。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナデ。 | 長石・海綿骨針 オリーブ灰色 良好 | P L 65 |
| | | B 4.0 | | | | P I 95% |
| | | C 7.0 | | | | 覆土上層 |
| 2 | 高台付環 須恵器 | A 6.9 | 口縁部一形欠損。高台はハの字状に開き、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部高台貼り付け後、ナデ。 | 長石・海綿骨針 褐色 良好 | P L 65 |
| | | B 7.8 | | | | P 2 95% |
| | | D 10.2 | | | | 覆土中層 |
| | | E 1.2 | | | | |
| 3 | 甗 須恵器 | A (20.9) | 高台部～口縁部片。高台はハの字状に開き、体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部との境に線をもつ。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部高台貼り付け後、ナデ。 | 長石・海綿骨針 灰黄褐色 良好 酸化炭焼成 | P L 65 |
| | | B 3.8 | | | | P 3 25% |
| | | D (13.4) | | | | 覆土上層 |
| | | E 1.0 | | | | |
| 4 | 蓋 須恵器 | A 8.2 | 天井部は平坦で、口縁端部は屈曲する。 | 天井部回転へう割り。口縁部内・外面ナデ。 | 長石・石英 灰色 良好 | P L 65 |
| | | B (2.2) | | | | P 4 20% |
| | | | | | | 覆土下層 |

| 図版番号 | 種別 | 計 測 値 | | | | 山土地点 | 備 考 |
|------|----|--------|-------|--------|--------|------|---------------|
| | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | | |
| 5 | 砥石 | 18.7 | 11.7 | 5.6 | 1586.2 | 床 面 | P L 65 Q I 砂岩 |
| 6 | 刀子 | (9.6) | 1.4 | 0.4 | (7.9) | 覆 上 | P L 65 M I 鉄製 |

第3号住居跡(第171・172図)

位置 調査区の東部北側, A2e区。

重複関係 本跡は、第4号住居跡と重複している。本跡が第4号住居跡を掘り込んでおり、本跡が新しい。

規模と平面形 北側が調査区外に延びているため正確な規模や平面形は不明であるが、一辺2.5mの方形か長方形と推定される。

主軸方向 N-90°

壁 壁高は約15cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

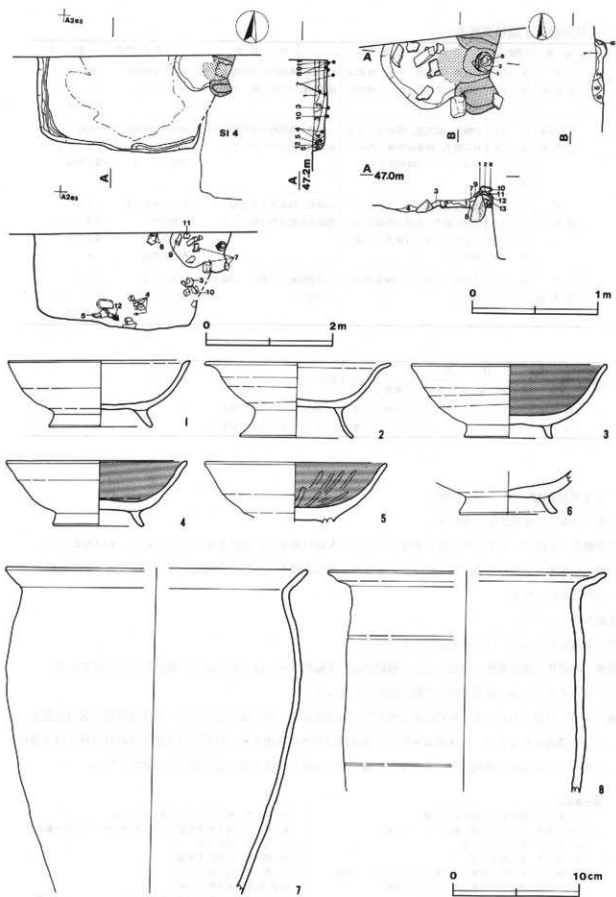
壁溝 西壁及び南壁東側で確認した。上幅約15cm、下幅約5cm、深さ約5cmで、断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦である。壁際を除いて踏み固められている。

煙 東壁に付設されている。耕作による攪乱のため煙道部の一部が壊されている。袖部は砂質の黄白色粘土によって構築されており、火床部は平坦で、煙道部は壁外に突出する。自然石の支脚上に高台付環3点を逆に重ねて高さ調節に利用している。また、竈前面には浅いくぼみがある。覆土は14層からなる。

竈土層解説

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子少量 | 8 黒褐色 焼土ブロック・焼土粒子中量 |
| 2 極暗赤褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック少量 | 9 黒褐色 焼土粒子多量、ローム粒子中量、白色粒子微量 |
| 3 灰褐色 粘土ブロック層 | 10 赤褐色 焼粘土層 |
| 4 黒褐色 焼土粒子少量 | 11 明褐色 炭化粒子多量 |
| 5 黒褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・粘土ブロック少量 | 12 赤褐色 焼土層 |
| 6 極暗褐色 焼土粒子中量、焼土ブロック少量 | 13 暗赤褐色 粘土粒子中量 |
| 7 黒褐色 焼土粒子・粘土粒子少量 | 14 黒褐色 粘土粒子中量、焼土粒子・ロームブロック少量 |



第171图 第3号住居跡・竈・出土遺物実測図(1)

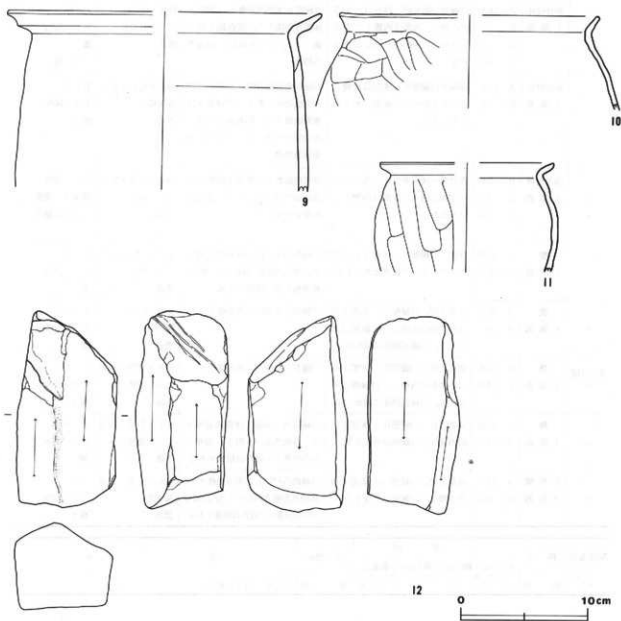
覆土 6層からなり、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子多量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 焼土ブロック中量、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 4 灰黄褐色 焼土粒子・ローム粒子・黄白色粘土粒子中量、炭化粒子微量
- 5 暗灰黄色 黄白色粘土ブロック多量、焼土粒子少量、ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・黄白色粘土粒子少量、炭化粒子微量

遺物 土師器片29点、須恵器片25点及び砥石1点が出土している。第171図1、2及び6の高台付環は支脚の高さ調節に使用されていたものである。3の高台付環は南東部の床面から、4の高台付環は南部の覆土下層から、また、5の高台付環と12の砥石は南壁中央部壁際の床面からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物から平安時代（10～12世紀）の住居跡と考えられる。竈が東壁に付設されていることや規模が小形であることなど他の住居跡との違いが認められる。



第172図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

第3号住居跡出土遺物観察表

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|---------|----------|---|--|---------------------------|------------------------------------|
| 第171図 1 | 高台付環土師器 | A 14.4 | 口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部を内削ぎする。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。 | 雲母・長石・石英 ふいり褐色 普通 | P.L65 P.5 85% 壺覆土、支脚の高さ調節に使用 |
| | | B 5.2 | | | | |
| | | D 8.2 | | | | |
| | | E 1.3 | | | | |
| | | 1.3 | | | | |
| 2 | 高台付環土師器 | A 14.7 | 口縁部一部欠損。ハの字状に開く。足高の高台が付く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。 | 雲母・長石・石英 浅黄褐色 普通 | P.L65 P.5 85% 壺覆土、支脚の高さ調節に使用 |
| | | B 6.0 | | | | |
| | | D 9.0 | | | | |
| | | E 2.2 | | | | |
| | | 2.2 | | | | |
| 3 | 高台付環土師器 | A 15.7 | 口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部内・外面、体部内面磨き。体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。内面黒色処理。 | 長石・石英・スクリヤ 灰黄褐色 普通 | P.L65 P.7 90% 覆土 外面横ナデ付 |
| | | B 5.9 | | | | |
| | | D 7.1 | | | | |
| | | E 1.1 | | | | |
| | | 1.1 | | | | |
| 4 | 高台付環土師器 | A 14.4 | 口縁部一部欠損。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 | 口縁部・体部内面磨き。口縁部・体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。ロクロ成形。内面黒色処理。 | 砂粒・長石 ふいり黄褐色 普通 | P.L65 P.9 70% 二次焼成 |
| | | B 5.2 | | | | |
| | | D 7.2 | | | | |
| | | E 1.3 | | | | |
| | | 1.3 | | | | |
| 5 | 高台付環土師器 | A 14.5 | 体部～口縁部片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 | 口縁部内面横方向の磨き。体部内面放射状の磨き。口縁部・体部外面横ナデ。回転糸切り後、高台貼り付け。ロクロ成形。内面黒色処理。 | 砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通 | P.L65 P.8 60% 覆土 |
| | | B (4.8) | | | | |
| 6 | 高台付環土師器 | B (2.9) | 高台部～体部下位片。高台はハの字状に開く。体部は内彎して立ち上がる。 | 体部内面磨き。体部外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。底部回転糸切り後、ナデ。 | 長石・石英・雲母 ふいり褐色 普通 | P.44 30% 壺覆土、支脚の高さ調節に使用 |
| | | D 7.8 | | | | |
| | | E 1.4 | | | | |
| 7 | 壺土師器 | A (24.0) | 体部、口縁部片。体部上位に最大径がある。口縁部は外反する。 | 口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面横方向のへう削り。輪轆痕を残し成形が粗雑。 | 長石・石英・スクリヤ ふいり褐色 普通 | P.L65 P.10 30% 覆土 |
| | | B (25.8) | | | | |
| 8 | 壺土師器 | A (22.2) | 体部上位、口縁部片。体部上位はわずかに内傾し、口縁部は外反する。口縁部側面に稜がある。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。 | 砂粒・長石・スクリヤ 灰白色 普通 | P.L65 P.11 10% 覆土 |
| | | B (14.7) | | | | |
| 第172図 9 | 壺土師器 | A (24.8) | 体部上位、口縁部片。体部上位はわずかに内傾し、口縁部は外反する。口縁部側面に稜がある。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。 | 長石・雲母・石英 ふいり褐色 普通 | P.L65 P.12 10% 覆土 |
| | | B (14.0) | | | | |
| 10 | 壺土師器 | A (20.6) | 体部上位、口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。 | 口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面へう削り。器壁の凹凸が著しく成形は粗雑である。 | 長石・石英・雲母 ふいり黄褐色 普通 | P.L65 P.13 10% 覆土 |
| | | B (7.4) | | | | |
| 11 | 小形壺土師器 | A (13.7) | 体部上位、口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。 | 口縁部内・外面、体部内面横ナデ。体部外面横方向のへう削り。器壁の凹凸が著しく成形は粗雑である。 | 長石・石英・雲母 灰褐色 普通 | P.L65 P.14 20% 覆土 |
| | | B (8.5) | | | | |

| 図版番号 | 種別 | 計測値 | | | | 出土地点 | 備考 |
|------|----|--------|-------|--------|---------|------|--------------|
| | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | | |
| 12 | 砥石 | (15.7) | 7.9 | 6.9 | (217.3) | 床面 | P.L65 Q.2 砂岩 |

第4号住居跡 (第173・174図)

位置 調査区の東部北側, A2e区。

重複関係 本跡は, 第3号住居跡と重複している。本跡が第3号住居跡に掘り込まれており, 本跡が古い。
規模と平面形 北側が調査区外に延びており, 東側が貯水槽によって壊されているため正確な規模や平面形は不明であるが, 一辺5.5mの方形か長方形と推定される。

主軸方向 (N-8°-E)

壁 壁高は約60cmで, ほぼ垂直に立ち上がる。

壁溝 西壁の一部で確認した。上幅約20cm, 下幅約10cm, 深さ約10cmで, 断面形はU字状である。

床 ほぼ平坦であるが, 全体的に中央部がわずかに低くなっている。中央部が良く踏み固められており, その中に円形及び不整形のくぼみがある。また, 南壁中央部際の床面には粘土の付着が認められた。

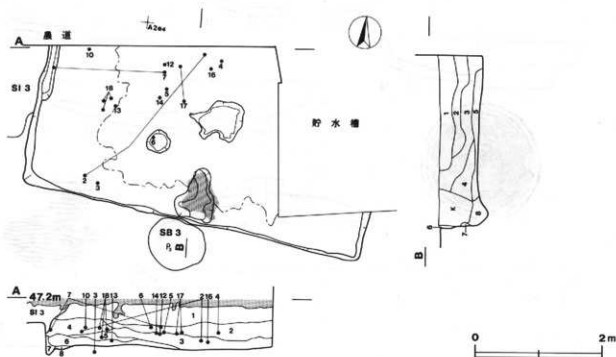
覆土 8層からなる。ロームブロックや黒色土ブロックを斑状に含む層があることから人為堆積と考えられる。

土層解説

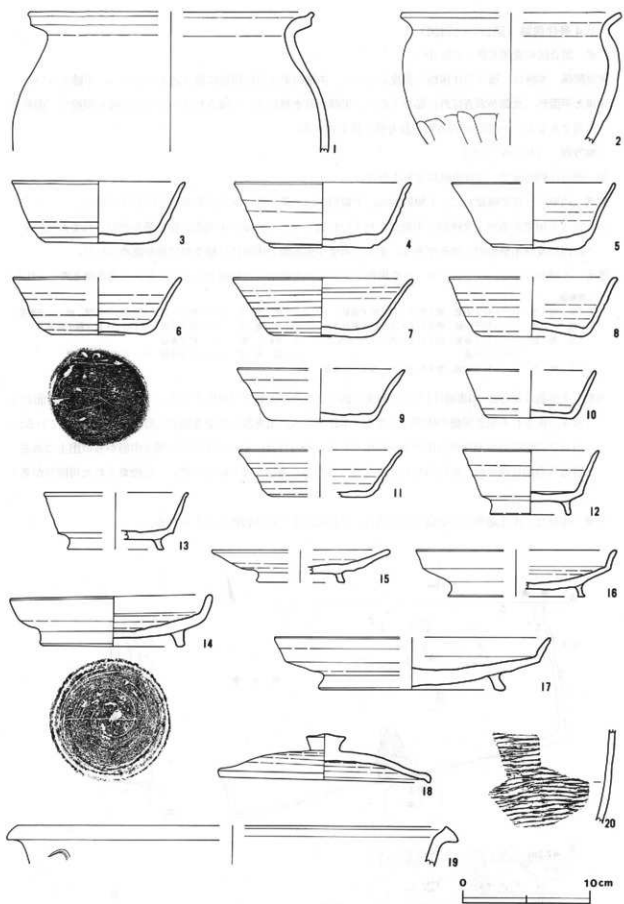
- | | | | |
|-------|------------------------------|-----------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・黒色土ブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量 | 7 黒オリーブ褐色 | ローム粒子多量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子中量, ロームブロック少量 |

遺物 土師器片263点, 須恵器片175点, 縄文土器片2点及び支脚3点が出土している。第174図20は外面に平行叩きが施される須恵器甕の体部片である。本跡からは, 須恵器の坏や蓋類の大形片が多数出土しているが, 3のはほぼ完形の坏が南西部の床面上から出土している以外は, そのほとんどが覆土中層からの出土である。本跡は人為的に埋め戻しが行われたとみられ, これらの遺物も埋め戻しの際に一括投棄された可能性が考えられる。

所見 本跡は, 出土遺物から奈良・平安時代(9世紀前半)の住居跡と考えられる。



第173図 第4号住居跡実測図



第174图 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 粘土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|-------------|----------|--|---|---------------------|--------------------------|
| 第174図 1 | 土師器 甕 | A [22.6] | 体部上位、口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。口縁端部を上方向につまみ上げる。口縁部側に棒状工具による凹線が施す。 | 口縁部内・外面横ナデ。 | 長石・雲母・石英 普通 | P L 66 |
| | | B (11.0) | | | | P 15 10% 覆土 |
| 2 | 土師器 甕 | A (17.4) | 体部、口縁部片。体部上位に最大径をもつ。体部上位で内傾し、口縁部は外反する。 | 口縁部内・外面、体部内面、外面上位横ナデ。体部外面下位縦方向のへう削り。 | 長石・雲母・スコリア にぶい褐色 | P L 66 |
| | | B (10.3) | | | | P 16 25% 覆土 |
| 3 | 須恵器 環 | A 13.8 | 口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナデ及び外周部回転へう削り後、ナデ。 | 小礫・長石・石英 灰色 | P L 66 |
| | | B 4.7 | | | | P 17 90% 覆土 |
| | | C 9.3 | | | | 良好 |
| 4 | 須恵器 環 | A 14.0 | 体部、口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナデ及び外周部回転へう削り後、ナデ。 | 小礫・海綿骨針 灰白色 | P L 66 |
| | | B 5.2 | | | | P 18 65% 覆土 |
| | | C 10.0 | | | | 良好 |
| 5 | 須恵器 環 | A [13.0] | 体部、口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナデ及び外周部回転へう削り後、ナデ。 | 長石 灰色 | P L 66 |
| | | B 5.2 | | | | P 19 65% 覆土 |
| | | C 8.0 | | | | 良好 |
| 6 | 須恵器 環 | A (13.4) | 体部、口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り後、ナデ及び外周部回転へう削り後、ナデ。 | 砂粒・長石 灰色 | P L 66 |
| | | B 4.5 | | | | P 20 55% 覆土 底部へう記号 |
| 7 | 須恵器 環 | A 14.3 | 底部、体部、口縁部一部欠損。底部に段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り及び外周部回転へう削り後、ナデ。酸化変成。 | 長石・海綿骨針 灰褐色 | P L 66 |
| | | B 4.7 | | | | P 21 60% 覆土 |
| | | C 8.7 | | | | 良好 |
| 8 | 須恵器 環 | A (13.3) | 底部へ口縁部片。底部は上げ底で段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部へう削り及び外周部回転へう削り後、ナデ。 | 砂粒・長石 灰色 | P 22 40% 覆土 |
| | | B 4.7 | | | | |
| | | C 9.1 | | | | 良好 |
| 9 | 須恵器 環 | A (13.3) | 底部へ口縁部片。底部は段をもち、体部は外傾して立ち上がり、外反しながら口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り及び外周部回転へう削り後、ナデ。 | 砂粒・長石 灰色 | P L 66 |
| | | B 4.2 | | | | P 23 45% 覆土 |
| | | C 8.8 | | | | 良好 |
| 10 | 須恵器 環 | A [10.4] | 底部へ口縁部片。底部は段をもち、体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部及び外周部回転へう削り。 | 小礫・長石 黄灰色 | P 24 45% 覆土 |
| | | B 3.8 | | | | |
| | | C [7.3] | | | | 良好 |
| 11 | 須恵器 環 | A (12.8) | 底部へ口縁部片。底部は段をもち、体部は外傾して立ち上がり、外反しながら口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り、及び外周部回転へう削り後、ナデ。 | 砂粒・長石 黄灰色 | P 25 30% 覆土 |
| | | B 3.7 | | | | |
| | | C [8.4] | | | | 良好 |
| 12 | 高台付須恵器 環 | A 10.8 | ハの字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、外反しながら口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう切り。高台貼り付け後、ナデ。 | 長石・海綿骨針 黄灰色 | P L 66 |
| | | B 5.1 | | | | P 26 80% 覆土 |
| | | D 6.4 | | | | |
| | | E 1.1 | | | | 良好 |
| 13 | 高台付須恵器 環 | A [11.4] | ハの字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。 | 小礫・長石 黄灰色 | P L 66 |
| | | B 4.5 | | | | P 27 40% 覆土 |
| | | D [7.6] | | | | |
| | | E 1.1 | | | | 良好 |

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴 | 丁法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|-------------|---------|----------|---|--|--------------------|--|
| 第174図 14 | 高台付環須恵器 | A 16.0 | 高台部～体部下位片。わずかに外方に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。 | 体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。高台貼り付け後、ナデ。 | 砂粒・長石 灰白色 普通 | P L 66 P 28 30% 覆土 破損部を水平に磨いて灯明具に転用 |
| | | B (4.1) | | | | |
| | | D 11.5 | | | | |
| | | E 1.1 | | | | |
| 15 | 皿須恵器 | A (14.0) | ハの字状に開く高台が付く。体部は外傾して口縁部にいたる。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。高台貼り付け後、ナデ。 | 小粒・長石 黄灰色 良好 | P L 66 P 32 20% 覆土 |
| | | B 2.6 | | | | |
| | | D 7.0 | | | | |
| | | E 0.8 | | | | |
| | | | | | | |
| 16 | 盤須恵器 | A (21.8) | やや丸底にハの字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。高台貼り付け後、ナデ。 | 砂粒・長石 褐灰色 良好 | P L 66 P 29 60% 覆土 |
| | | B 4.1 | | | | |
| | | D 14.8 | | | | |
| | | E 1.1 | | | | |
| | | | | | | |
| 17 | 盤須恵器 | A (15.8) | やや丸底にハの字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り後、高台貼り付け。高台貼り付け後、ナデ。11縁部、体部内・外面に自然釉付着。 | 砂粒・長石 褐灰色 良好 | P L 66 P 30 60% 覆土 |
| | | B 3.7 | | | | |
| | | D (10.8) | | | | |
| | | F 1.2 | | | | |
| 18 | 蓋須恵器 | A (16.6) | 口縁部一部欠損。中央部がわずかに突出したつまみが付く。天井部はやや丸みを帯び、口縁端部は屈曲する。 | 天井部回転へう削り。口縁部内・外面横ナデ。つまみ貼り付け後、ナデ。11縁部内・外面に自然釉付着。 | 砂粒・長石 褐灰色 良好 | P L 66 P 31 80% 覆土 |
| | | B 3.6 | | | | |
| 19 | 甕須恵器 | A (33.8) | 口縁部片。11縁部は外反し、口縁端部に縁帯が走る。 | 口縁部内・外面自然釉付着。口縁部内・外面横ナデ。口縁部外面に波状沈澱を施す。 | 長石 灰褐色 良好 | P 33 5% 覆土 |
| | | B (3.1) | | | | |

表8 前側遺跡住居跡一覧表

| 住居跡番号 | 位置 | 主軸方向 | 平面形 | 規模(m) (長軸×短軸) | 壁高(m) | 内部施設 | | | | | | 炉・竈 | 覆土 | 出土遺物 | 備考 新旧関係(古→新) |
|-------|------|----------|------|------------------|-------|------|----|----|----|-----|----|-----|------------------------------|------------------------|----------------------|
| | | | | | | 壁溝 | 土壇 | 土床 | 土間 | ピット | 入口 | | | | |
| 1 | A9a, | N-11°-E | 長方形 | 4.2×3.5 | 25 | 平坦 | - | - | - | 6 | - | 覆1 | 人為 | 土師器27 須恵器6 粘土器 緑4 炭化朽木 | 奈良・平安時代 本跡→S510 |
| 2 | A2a, | (N-2°-E) | 方形 | 4.3×- | 35 | 平坦 | - | - | - | - | - | 自然 | 土師器32 須恵器43 粘土器5 磁石7 刀子1 磁石 | 奈良・平安時代(9世紀前半) 本跡→S12 | |
| 3 | A5a, | N-90° | (方形) | 2.5×- | 15 | 平坦 | 一部 | - | - | - | - | 覆1 | 自然 | 土師器29 須恵器25 磁石1 釧17 | 平安時代(10～12世紀) S14-本跡 |
| 4 | A2a, | (N-8°-E) | (方形) | 5.5×- | 60 | 平坦 | 一部 | - | - | - | - | 人為 | 土師器263 須恵器175 縄文土器2 文器3 磁石27 | 奈良・平安時代(9世紀前半) 本跡→S13 | |

2 掘立柱建物跡

今回の調査では、奈良・平安時代の掘立柱建物跡4棟を確認した(SB-1～4)。以下、その特徴について記載する。

第1号掘立柱建物跡(第175図)

位置 調査区の西部北側, A1f, 区。

重複関係 本跡は、第6、7号土坑と重複するが、土坑と柱穴との切り合いがないため新旧関係は不明である。

規模 東西5間(約10m)、南北の規模は北側が調査区外に延びているため不明である。柱間寸法は桁行2m、

梁行2.7mである。柱穴はP₁～P₆。P₂～P₁₀の2列を確認した。P₁～P₆の掘り方には平面形が円形のもの
と長方形のもの切り合いが認められ、前者は径70～80cmの不整形形で、深さは25～50cm、後者は長軸約100cm、
短軸約70cmの長方形で、深さは20～35cmである。P₇～P₁₀の掘り方には切り合いはなく、径60～70cmの不整
円形で、深さ30～50cmである。柱痕は確認できるものときないものがあったが、柱痕から推定される柱はP₁
～P₆は径20～30cm、P₇～P₁₀は径15～25cmである。また、P₁、P₂では柱底が2か所確認されている。

土層解説

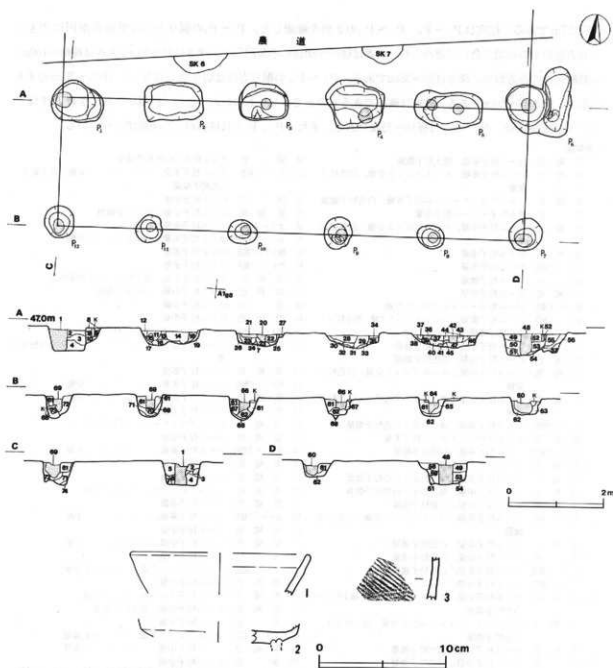
| | | | |
|------------|------------------------------|------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒中量、焼土粒子微量 | 34 黒色 | ローム粒子・白色粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量、白色粒子微量 | 35 オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量、焼土粒子・白色粒子微量 |
| 3 黄褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量、白色粒子微量 | 36 黒色 | ローム粒子中量 |
| 4 黒色 | 焼土粒子・ローム粒子少量 | 37 黒褐色 | ローム粒中量、焼土粒子微量 |
| 6 黒褐色 | ローム粒中量、ロームブロック少量、白色粒子微量 | 38 オリーブ褐色 | ローム粒子多量 |
| 7 黒褐色 | ローム粒中量 | 39 オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| 8 オリーブ褐色 | ローム粒多量 | 40 暗オリーブ褐色 | ローム粒子多量 |
| 9 黒色 | ローム粒子微量 | 41 暗オリーブ褐色 | ローム粒子多量 |
| 10 黒褐色 | ローム粒中量 | 42 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・白色粒子微量 |
| 11 暗オリーブ褐色 | ローム粒・ロームブロック多量 | 43 黒褐色 | ローム粒中量、白色粒子微量 |
| | 炭化粒子微量 | 44 黒色 | ローム粒子少量 |
| 12 黒褐色 | ローム粒中量、白色粒子微量 | 45 黒褐色 | ローム粒中量 |
| 13 黒褐色 | ローム粒少量、白色粒子微量 | 46 暗オリーブ褐色 | ロームブロック・ローム粒少量 |
| 14 黒褐色 | ローム粒中量、ロームブロック少量、白色粒子微量 | 47 暗オリーブ褐色 | ローム粒多量、ロームブロック中量、白色粒子微量 |
| 15 黒褐色 | ローム粒中量、焼土粒子・炭化粒子・白色粒子微量 | 48 黒褐色 | ローム粒多量 |
| 16 オリーブ褐色 | ローム粒多量、焼土粒子・白色粒子微量 | 49 暗オリーブ褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量 |
| 17 黄褐色 | ロームブロック・ローム粒多量 | 50 黒褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量 |
| 18 暗オリーブ褐色 | ローム粒多量、白色粒子微量 | 51 黒色 | ローム粒少量 |
| 19 黒褐色 | ロームブロック多量 | 52 黄褐色 | ロームブロック・ローム粒多量 |
| 20 黒褐色 | ローム粒少量、焼土粒子・白色粒子微量 | 53 黒褐色 | ローム粒中量 |
| 21 黒褐色 | ローム粒中量、焼土粒子・白色粒子微量 | 54 暗オリーブ褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量 |
| 22 黒褐色 | ローム粒少量、白色粒子微量 | 55 黒褐色 | ローム粒少量 |
| 23 暗オリーブ褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量、白色粒子微量 | 56 黒褐色 | ローム粒中量 |
| 24 黒褐色 | ローム粒少量、白色粒子微量 | 57 黄褐色 | ロームブロック・ローム粒多量 |
| 25 黒色 | ローム粒少量、白色粒子微量 | 58 黒褐色 | ローム粒多量 |
| 26 暗オリーブ褐色 | ローム粒多量、白色粒子微量 | 59 暗オリーブ褐色 | ローム粒多量、ロームブロック少量 |
| 27 オリーブ褐色 | ローム粒多量、ロームブロック中量 | 60 黒褐色 | ローム粒少量 |
| 28 黒褐色 | ローム粒中量、ロームブロック少量、焼土粒子・白色粒子微量 | 61 黒褐色 | ローム粒中量、ロームブロック少量 |
| 29 黒褐色 | ロームブロック・ローム粒中量、焼土粒子・白色粒子微量 | 62 黒色 | ローム粒少量 |
| 30 黒褐色 | ローム粒少量、白色粒子微量 | 63 オリーブ褐色 | ロームブロック中量、ローム粒少量 |
| 31 黒色 | ローム粒少量、白色粒子微量 | 64 黒褐色 | ローム粒中量 |
| 32 暗オリーブ褐色 | ローム粒中量、ロームブロック少量、焼土粒子・白色粒子微量 | 65 黒褐色 | ローム粒・ロームブロック少量 |
| 33 黒色 | ローム粒少量 | 66 黒褐色 | ローム粒中量、焼土粒子微量 |
| | | 67 黒色 | ローム粒少量 |
| | | 68 オリーブ褐色 | ロームブロック多量、ローム粒微量 |
| | | 69 黒褐色 | ローム粒中量、ロームブロック少量 |
| | | 70 黒色 | ローム粒少量 |
| | | 71 オリーブ褐色 | ロームブロック・ローム粒多量 |
| | | 72 黒褐色 | ローム粒中量 |
| | | 73 黒褐色 | ローム粒中量、ロームブロック少量 |
| | | 74 黒褐色 | ローム粒中量 |

長軸方向 N-87-E

覆土 人為堆積である。

遺物 土師器片6点、須恵器片22点が出土している。第175図1の環はP₁₀、2の高台付環はP₇の覆土から出上している。3はP₇の覆土中から出土した須恵器の甕の体部片で、外面に平行叩きが施されている。

所見 本跡は、2列の柱穴が確認されたが、P₇～P₁₀の掘り方や柱痕の規模がP₁～P₆に比べて小さいことから前者は庇と考えられる。また、P₁～P₆は円形と長方形の掘り方の切り合いがみられることから建て替えが行われており、新旧関係は切り合いの状況から長方形のものが古く円形のものが新しいとみられる。これに対して、庇には建て替えの跡はなく、P₇～P₁₀の円形の掘り方と対応していることから、庇は建て替え後に付けられたものと考えられる。時期は、掘り方覆土から9世紀前半に位置付けられる須恵器片が出土して



第175図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

おり、しかも付近に10世紀代の住居跡があるにもかかわらずその時期の遺物が出土していないことから、奈良・平安時代（9世紀前半）の頃と推定される。性格については不明である。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表

| 図版番号 | 器種 | 計測値(m) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 粘土・色調・構成 | 備考 |
|------------|------|----------|--------------------------------|--------------------------------|----------------|-------------------|
| 第175図 1 | 坏 | A (14.2) | 口縁部、体部下位片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。 | 長石・砂粒 灰色 | P L66 P35 5% |
| | 須恵器 | B (3.3) | | 良好 | | P ₀ 覆土 |
| 2 | 高台付坏 | B (1.6) | 底部、体部下位片。体部は外傾して立ち上がる。 | 体部内・外面横ナデ。底部回転へう削り。高台貼り付け後、ナデ。 | 長石・石英 オリーブ色 | P L66 P36 5% |
| | 須恵器 | | | | 良好 | P ₀ 覆土 |

第2号掘立柱建物跡（第176図）

位置 調査区の西部北側，A2e₁区。

重複関係 本跡は，第2号住居跡と重複する。本跡の柱穴が第2号住居跡を掘り込んでおり，本跡が新しい。

規模 東西5間（約9.2m），南北の規模は北側が調査区外に延びているため不明である。柱穴はP₁～P₆の1列だけを確認した。柱間寸法は1.6～1.8mである。掘り方は長径85～100cm，短径60～80cmの楕円形か不整形形で，深さは25～40cmである。柱痕は確認できるものとできないものがあるが，柱痕から推定される柱は径約25cmである。

長軸方向 N-84°-E

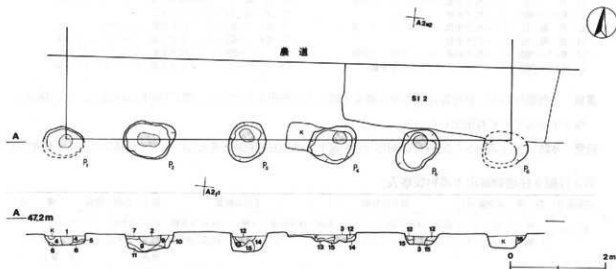
覆土 人為堆積で，柱回りをローム混じりの黒褐色土やオリーブ褐色土で埋め戻している。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ロームブロック少量，白色粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量，白色粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・白色粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量，白色粒子微量
- 6 暗オリーブ褐色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量
- 8 オリーブ褐色 ロームブロック多量，ローム粒子中量
- 9 暗オリーブ褐色 ローム粒子多量，ロームブロック少量，白色粒子微量
- 10 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 11 黒褐色 ローム粒子少量，白色粒子微量
- 12 黒褐色 ローム粒子少量
- 13 暗オリーブ褐色 ローム粒子中量
- 14 暗オリーブ褐色 ローム粒子多量
- 15 オリーブ褐色 ロームブロック多量，ローム粒子中量
- 16 暗オリーブ褐色 ローム粒子中量

遺物 土師器片4点，須恵器片9点，縄文土器片3点が出土しているがいずれも細片である。

所見 本跡は，出土遺物が細片であるため，遺物から時期を推定するのは困難である。しかし，本跡は第2号住居跡との重複関係から9世紀前半をさかのぼることはなく，第1号掘立柱建物跡と規模や主軸方向が近似することから第1号掘立柱建物跡とほぼ同一時期と考えられるので，奈良・平安時代（9世紀前半）の頃のものとして推定される。性格は不明である。



第176図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡 (第177区)

位置 調査区の西部南側、A2f区。

重複関係 本跡は、第4号掘立柱建物跡と重複する。柱穴の重複がないため切り合いからの新旧関係は不明である。
規模 東西2間(約5.2m)、南北2間を確認したが、南側が調査区外に延びているため南北の規模は不明である。創柱構造で、柱穴は7か所(P₁~P₇)確認した。柱間寸法は桁行1.8~2.1m、梁行2.5mである。掘り方は長径70~90cm、短径70~80cmの楕円形か不整形形で、深さは35~110cmである。すべての柱穴に柱痕があり、柱痕から推定される柱は径25~35cmである。

長軸方向 N-5°-W

覆土 人為堆積であるが、柱痕の中には柱を抜き取った後埋戻したものと柱が抜き取られないまま腐朽したものがあつたと推定される。

土層解説

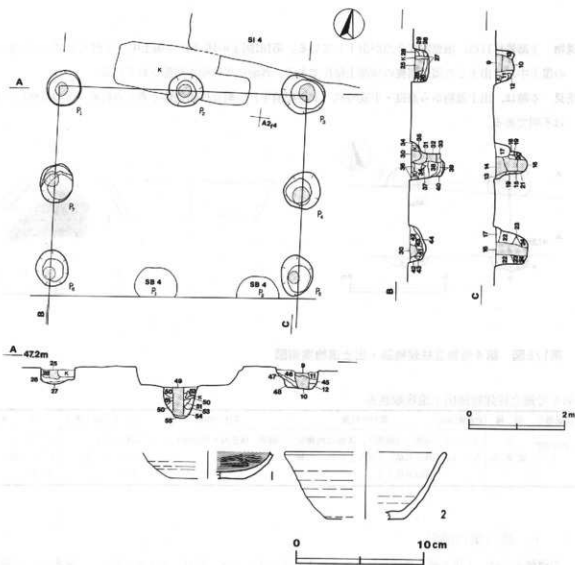
| | | | |
|------------|------------------------------|------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 26 黒色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 27 帯オリーブ褐色 | ロームブロック少量、ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子・ロームブロック少量 | 28 帯オリーブ褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 黒色 | ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 29 オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| 5 暗褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 30 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 6 にぶい黄褐色 | ローム粒子中量 | 31 帯オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 7 にぶい黄褐色 | ローム粒子多量、粘土粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 32 黄褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 8 淡黄褐色 | ローム粒子・粘土粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 33 黒褐色 | ロームブロック・ローム粒子中量 |
| 9 暗褐色 | ローム粒子中量 | 34 オリーブ褐色 | ローム粒子多量 |
| 10 黒褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量、焼土粒子微量 | 35 黄褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| 11 黒褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 | 36 黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 12 オリーブ褐色 | ローム粒子多量 | 37 黒色 | 黒色土ブロック多量、ローム粒子中量 |
| 13 オリーブ褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量 | 38 黄褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 14 オリーブ褐色 | ローム粒子多量 | 39 黒褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 |
| 15 帯オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 | 40 帯オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| 16 黒色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 | 41 黒色 | ローム粒子中量、焼土粒子微量 |
| 17 帯オリーブ褐色 | ローム粒子微量 | 42 黒褐色 | ローム粒子多量、焼土粒子微量 |
| 18 黄褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 | 43 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| 19 黒褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量、炭化粒子微量 | 44 オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| 20 黒色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 | 45 オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量 |
| 21 帯オリーブ褐色 | ローム粒子多量 | 46 オリーブ褐色 | ローム粒子多量 |
| 22 黒褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 | 47 オリーブ褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 |
| 23 黒褐色 | ローム粒子少量 | 48 黄褐色 | ローム粒子多量 |
| 24 帯オリーブ褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 | 49 帯オリーブ褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量 |
| 25 帯オリーブ褐色 | ロームブロック・ローム粒子多量 | 50 黒褐色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 |
| | | 51 黒褐色 | ローム粒子中量 |
| | | 52 帯オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック少量 |
| | | 53 帯オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量 |
| | | 54 オリーブ褐色 | ローム粒子多量、ロームブロック中量 |
| | | 55 黒色 | ローム粒子中量、ロームブロック少量 |

遺物 土師器片14点、須恵器片30点及び縄文土器片4点が出土している。第177区1の環はP₄、2の環はP₄の覆土中からそれぞれ出土している。

所見 本跡は、出土遺物から奈良・平安時代(9世紀後半)の掘立柱建物跡と考えられる。その性格については不明である。

第3号掘立柱建物跡出土遺物観察表

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|-----|----------|--|-------------------------------|-------------------------|---------|
| 第177区 1 | 環 | B (2.2) | 底部、体部下位片。平底。体部は内彎して立ち上がる。 | 体部内面へう磨き。体部外面横ナデ。口口成形。内面染色処理。 | 長石・雲母・スクリア にぶい黄褐色。 | P1.66 |
| | 土師器 | C (5.8) | | | | 青漆 |
| 2 | 環 | A (12.8) | 底部へ口縁部片。平底。体部は内彎如味に外傾して立ち上がり、口縁部は反外する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。 | 長石・石英・スクリア 灰黄色 良好 | P1.66 |
| | 須恵器 | B (5.3) | | | | P38 10% |
| | | C (6.1) | | | | P1.覆土 |



第177図 第3号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第4号掘立柱建物跡 (第178図)

位置 調査区の西部南側, A2f.区。

重複関係 本跡は, 第3号掘立柱建物跡と重複する。柱穴の重複がないため切り合いからの新旧関係は不明である。

規模 柱穴を2か所 (P₁, P₂) 確認しただけであるため, 規模は不明である。柱間寸法は2.0mで, 掘り方は径80~90cmの不整形と推定される。深さは20~30cmである。柱穴には柱痕があり, 柱痕から推定される柱は径約25~30cmである。

長軸方向 [N-2°-E]

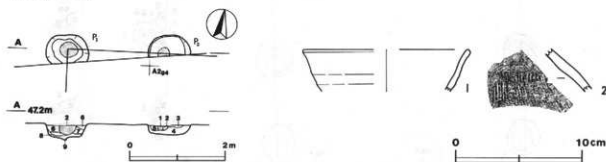
覆土 人為堆積である。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量 | 6 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒色 ローム粒子少量 | 7 暗オリーブ褐色 ローム粒子多量, ロームブロック少量 |
| 3 黒褐色 ローム粒子少量 | 8 黒褐色 ローム粒子中量 |
| 4 暗オリーブ褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 9 暗オリーブ褐色 ロームブロック・ローム粒子少量 |
| 5 黒褐色 ローム粒子少量 | |

遺物 土師器片11点、須恵器片3点が出土している。第181図1の坏はP₁の覆土中から出土している。2はP₁の覆土中から出土した須恵器甕の体部上位片である。外面に平行叩きが施されている。

所見 本跡は、出土遺物から奈良・平安時代（9世紀前半）の掘立柱建物跡と考えられる。その性格については不明である。



第178図 第4号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|----------|---------------------|-------------------------------------|----------------|-----------------------|--|
| 第178図 1 | 坏 須恵器 | A (13.0) B (3.3) | 体部、口縁部片。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。 | 口縁部、体部内・外面横ナデ。 | 砂粒・長石 灰オリーブ色 良好 | P.L66 P.39 10% P ₁ 覆土 |

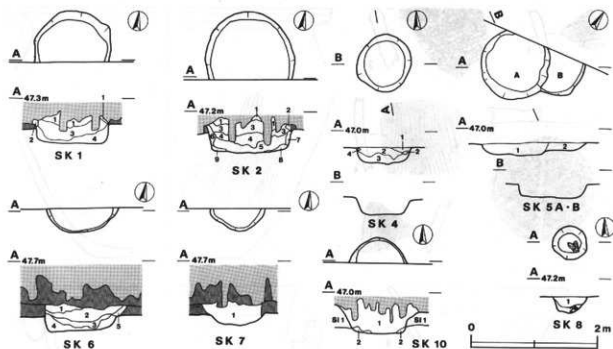
3 土坑(第179図)

当遺跡からは、土坑9基を確認した(SK-1, 2, 4, 5A, 5B, 6~8, 10)。一覧表にして掲載する。

奈良文化財研究所 遺跡調査部 調査報告書 第179号

表9 前側遺跡土坑一覧表

| 番号 | 位置 | 長径方向 (長軸方向) | 平面形 | 壁 植 | | 壁面 | 底面 | 覆土 | 出土遺物 | 備考 新旧関係(古→新) | 図版 番号 |
|----|------------------|----------------|------|---------|-------|----|-----|----|--------------|-----------------|----------|
| | | | | 長さ×幅(m) | 深さ(m) | | | | | | |
| 1 | A1g ₁ | - | [円形] | 1.2×- | 32 | 垂直 | 編底 | 自然 | 須恵器3 縄文土器1 | | 179 |
| 2 | A1g ₁ | - | [円形] | 1.4×- | 35 | 垂直 | 編底 | 自然 | 土師器4 須恵器3 縄1 | | 179 |
| 4 | A1g ₁ | - | [円形] | 0.9×- | 25 | 外傾 | 平坦 | 自然 | 土師器1 | | 179 |
| 5A | A1f ₁ | - | [円形] | 1.1×- | 20 | 外傾 | 凹凸 | 自然 | 土師器1 須恵器1 | | 179 |
| 5B | A1f ₁ | - | [円形] | [1.0×- | 10 | 外傾 | 平坦 | 自然 | 土師器1 縄1 | | 179 |
| 6 | A1e ₁ | - | [円形] | [1.1]×- | 24 | 外傾 | 傾斜 | 自然 | 土師器1 須恵器1 | SB1と重複(新旧関係不明) | 179 |
| 7 | A1e ₁ | - | [円形] | [0.9]×- | 18 | 外傾 | U字状 | 自然 | | SB1と重複(新旧関係不明) | 179 |
| 8 | A2f ₁ | - | [円形] | 0.55×- | 25 | 外傾 | 凹凸 | 自然 | 縄2 | | 179 |
| 10 | A1g ₁ | - | [円形] | [1.0]×- | 35 | 外傾 | 編底 | 自然 | | SH0→本跡 | 179 |



第179図 第1・2・4・5A・5B・6~8・10号土坑実測図

SK-1 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量
- 3 黒色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

SK-2 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 黒色 ローム粒子少量
- 5 黒色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量
- 7 黒褐色 ローム粒子多量
- 8 黒色 ロームブロック・ローム粒子中量
- 9 極暗褐色 ロームブロック・ローム粒子中量

SK-4 土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子多量, 焼土粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 黒色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子微量

- 4 褐色 ローム粒子多量

SK-5A・5B 土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量

SK-6 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子多量, 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒色 ローム粒子中量, ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒色 ローム粒子多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 黒色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

SK-7 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量

SK-8 土層解説

- 1 黒色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量

SK-10 土層解説

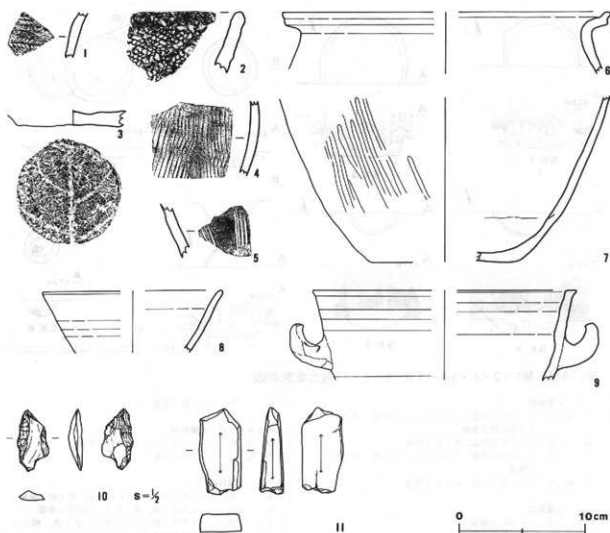
- 1 黒褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子中量, ロームブロック少量

4 遺構外出土遺物 (第180図)

当遺跡の遺構外からは、縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。主な遺物を一覧表で記載する。

遺構外出土遺物観察表

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴及び文様 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|------|---------|-------------------------|----------------------|---------------|
| 第180図 1 | 縄文土器 | 厚さ 0.7 | 体部片。半截竹管による有筋沈線が施されている。 | 石英・長石・スコリア 黄褐色 普通 | TP 8 1% 表土 |



第180図 遺構外出土遺物実測図

| 図版番号 | 器種 | 計測値(m) | 器形の特徴及び文様 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|-----------|--------|-----------------------------|---------------------|---------------|
| 第180図 2 | 一 縄文土器 | 厚さ 0.9 | 口縁部片。粗い縄文地に隆帯による文様が施されている。 | 砂粒・スコリア に多い褐色 普通 | TP 9 1% 表土 |
| 3 | 壺 土師器 | 厚さ 0.8 | 底部片。底部に木葉痕。輪轆み部で割断。 | 長石・スコリア に多い褐色 普通 | TP 5 5% 表土 |
| 4 | 壺 須恵系 | 厚さ 0.6 | 体部片。外面に平行叩きが施されている。外面自然輪付着。 | 長石・石英 灰白色 良好 | TP 7 2% 表土 |
| 5 | 摺 陶器 | 厚さ 0.7 | 体部片。内・外面に鉄輪が施されている。瀬戸・美濃系。 | 長石 灰白色 良好 | TP 6 1% 表土 |

| 図版番号 | 器種 | 計測値(m) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------|----------|----------------------|--|----------------|-------------------------|-------------------------|
| 6 | 壺 土師器 | A [26.2] B (5.9) | 体部上位。口縁部片。体部上位は内傾し、口縁部は外反する。口縁端部を上方につまみ上げる。口縁部側面に棒状工具による凹線が遺る。 | 口縁部内・外面横ナデ。 | 長石・石英・雲母 に多い褐色 普通 | PL 66 P 41 5% 表土 |
| 7 | 壺 土師器 | B (13.0) | 底部。体部下位片。平底。体部は内彎しながら外傾して立ち上がる。 | 体部外面下位縦方向へう磨き。 | 長石・雲母・石英 に多い褐色 普通 | PL 66 P 40 15% 表土 |

| 図版番号 | 器種 | 計測値(cm) | 器形の特徴 | 手法の特徴 | 胎土・色調・焼成 | 備考 |
|------------|-------------|----------|---|----------------|-------------------------|---------------|
| 第180図 8 | 環 須 器 | A (14.4) | 体部、L縁部片。体部は外輪して立ち上がり、L縁部は外反する。 | L縁部、体部内・外面横ナデ。 | 長石・石英 灰黄褐色 良好 | P42 10% 表土 |
| | | B (4.9) | | | | |
| 9 | 甗 須 器 | A (21.0) | 体部上位、口縁部片。体部は外輪して立ち上がり、黄緑的に口縁部に至る。体部上位にL字状の把手を付し、口縁端部は肥厚する。 | L縁部、体部内・外面横ナデ。 | 小粒・長石・スロリア 黄褐色 良好 | P43 5% 表土 |
| | | B (7.2) | | | | |

| 図版番号 | 種別 | 計測値 | | | | 出土地点 | 備考 |
|------|-----|--------|-------|--------|--------|-------|-------------------|
| | | 長さ(cm) | 幅(cm) | 厚さ(cm) | 重量(g) | | |
| 10 | 石 球 | 3.2 | 1.6 | 0.7 | 2.4 | 遺構確認面 | P L66 Q4 チャート 未製品 |
| 11 | 砥 石 | (6.8) | 3.3 | 1.4 | (53.1) | 表 土 | Q3 凝灰岩 |

第4節 まとめ

前編遺跡では、縄文時代、奈良・平安時代及び中・近世の長い時代にわたる遺構や遺物を確認した。それらの調査成果を時代ごとにまとめて記載する。

(1) 縄文時代

遺構は確認されず、縄文土器片が表土及び後代の遺構覆土中から少量出土しているのみである。土器片は細片が多く詳細な時期を特定するのが困難であるが、大半は中期の阿玉台式や加留利E式のものと思われる。

(2) 奈良・平安時代

竪穴住居跡4軒と掘立柱建物跡4棟を確認した。3期に分けることができる。

第1期（9世紀前半）

第2、4号住居跡、第1、2、4号掘立柱建物跡が該期の遺構である。これらの遺構については次のようなことがいえる。

- ・第1号掘立柱建物跡は建て替えが行われており、庇のない(旧)第1号掘立柱建物跡と庇をもつ(新)第1号掘立柱建物跡の2遺構がある。
- ・第1号掘立柱建物跡と第2号掘立柱建物跡は主軸方向がほぼ同一で主柱の外郭線が直線上に並ぶことから、同時期に存在したとみられる。
- ・第2号住居跡と第2号掘立柱建物跡は重複しており、第2号住居跡が古い。
- ・第2住居跡と第4号住居跡は3mしか離れていないこと、主軸方向が異なることから時間差があるとみられる。
- ・第2号住居跡と第4号掘立柱建物跡の主軸方向がほぼ一致しており、同一時期の可能性がある。

以上のことから、(旧)第1号掘立柱建物跡、第4号掘立柱建物跡及び第2号住居跡が古く、(新)第1号掘立柱建物跡、第2号掘立柱建物跡及び第4号住居跡がより新しいという新旧関係が考えられる。

第2期（9世紀後半）

第3号掘立柱建物跡が該期の遺構である。前時期の第4号住居跡と接して建てられており、第4号住居跡が

自然埋没している状況からみて両者の間にはある程度の時間差があったものと考えられる。

第3期 (10～12世紀)

第3号住居跡が該期の遺構である。規模が小さく、竈が東壁に付設されているという特徴をもつ。また、竈では自然石の支脚の上に高台付坏を逆位に重ねて高さ調節をするという特異な方法も使われている。

(3) 中・近世

該期の遺構は確認されなかった。内耳鍋や播鉢などの土師質土器や陶器類の破片が表土中から少量出土したのみである。

以上をまとめると、前側遺跡においては、今回の調査で縄文時代から中・近世までの遺物が出土した。遺跡の中心は奈良・平安時代であり、該期の竪穴住居跡と掘立柱建物跡を確認した。なかでも掘立柱建物跡は、当時としてはかなり大規模なものである。その性格については、規模の点から寺院や官衙などの建物の可能性が考えられるが、それらに関連した遺物は今回の調査では確認できなかった。また、道路幅の調査であったため各遺構の正確な規模や構造及び配置等もつかめなかったこともあり、その性格を明らかにすることはできなかった。ただし、当地域に9世紀当時、大規模な掘立柱建物が複数建てられ、しかも長期間にわたって存在していたことは確かであり、今後9世紀という時代背景を考えながらその性格を解明していく必要があると思われる。

参考文献

- 浅井哲也 「茨城県内における奈良・平安時代の土器(I・II)」『研究ノート 創刊号・2号』茨城県教育財団 1992・93年 7月
- 萩野谷悟 「常北町上入野・青木・仲郷・後側・前側遺跡の発掘調査」『常北の文化 第17号』常北町郷土文化研究会 1994年 3月

付章 自然科学分析

パリオサーヴェイ株式会社

—目次—

第1章 上入野遺跡・・・・・・ P. 287

| | |
|---------|--------|
| I. はじめに | P. 287 |
| II. 試料 | P. 287 |
| III. 方法 | P. 288 |
| IV. 結果 | P. 288 |
| V. 考察 | P. 291 |
| 引用文献 | P. 292 |

第2章 青木遺跡・・・・・・ P. 293

| | |
|---------|--------|
| I. はじめに | P. 293 |
| II. 試料 | P. 293 |
| III. 方法 | P. 293 |
| IV. 結果 | P. 293 |
| V. 考察 | P. 293 |
| 引用文献 | P. 293 |

第3章 前側遺跡・・・・・・ P. 295

| | |
|---------|--------|
| I. はじめに | P. 295 |
| II. 試料 | P. 295 |
| III. 方法 | P. 295 |
| IV. 結果 | P. 295 |
| V. 考察 | P. 297 |
| 引用文献 | P. 297 |

—図表一覧—

表1 上入野遺跡・重鉱物および火山ガラス比分析結果

表2 前側遺跡・炭化材同定結果

図1 上入野遺跡・重鉱物組成および火山ガラス比

—図版一覧—

図版1 上入野遺跡・重鉱物および火山ガラス

図版2 上入野遺跡・炭化材

図版3 青木遺跡・種実遺体

図版4 前側遺跡・炭化材(1)

図版5 前側遺跡・炭化材(2)

第1章 上入野遺跡

I. はじめに

東茨城台地は常陸台地のなかで、もっとも北に位置し、那珂川と北浦に注ぐ巴川に挟まれている。この地域の地形・地質については、坂本ほか(1972)により以下のように記載されている。台地主体は、下末吉海進にともなって形成された海成層である見和層によって構成されている。その北東側には、3段の河岸段丘が順次配列する。河岸段丘のうち最上位が上市段丘で、段丘礫層の上位には褐色火山灰上層(いわゆるローム層)が発達している。ローム層は、宇都宮周辺の宝木ローム層・田原ローム層に対比されている。また、ローム層中には赤城一岳沼軽石(A8-KP;新井,1962)の地積が認められている。A8-KPは赤城火山を給源とし、降灰年代は約3.1~3.2万年前と考えられている。(町田・新井,1992)。したがって、この段丘の離水時期はA8-KP降灰以前で、段丘面は武蔵野台地の武蔵野面にほぼ対比される。

上入野遺跡は、東茨城台地北部の那珂川支流の藤井川と前沢川に挟まれた上入野台地東端部付近に立地する。本台地は、上述の上市段丘にあたる。

発掘調査により、旧石器時代から奈良・平安時代の遺構・遺物が確認されている。とくに旧石器時代では、A8-KP層の直上から土坑が確認された。また、古墳時代から奈良・平安時代にかけて長い期間、集落が営まれたことが推定されている。

今回の自然科学分析では、旧石器時代の上坑の構築時期を推定するために、重鉱物分析および火山ガラス比分析による層序確立を行う。火山ガラス比分析では、ローム中に混交する指標テフラ由来の細粒の火山ガラスの産状を調べることで、降灰層準を推定する。また、重鉱物分析では、ローム層の重鉱物組成の層的变化を調べ、対比の鍵に用いる。本分析は武蔵野台地の立川ローム層では対比資料が比較的多いため、とくに有効な手段となっている。本遺跡周辺では対比資料が少ないが、遺跡の層序を記載する際の基礎資料となる。

また、古墳時代の住居構築材の用材選択について検討するために、柱材と考えられている炭化材の樹種同定を行う。そして、その結果と周辺の遺跡におけるこれまでの分析例との比較検討を行う。

II. 試料

1. ローム層序の確立

テストピットの地層断面は、上位より1層から13層に分層されている。1層から3層は明黄褐色土層、4層・5層は黄褐色土層、6層はオリーブ褐色土層、7層は黄褐色土層、8層はにぶい黄色土層、9層上部は黄色土層、下部は黄褐色土層、10層から12層はオリーブ褐色土層、13層はにぶい黄褐色土層である。いずれもローム層である。このうち7層から9層はA8-KP層である。土坑SK-14は6層以下を掘り込んでおり、5層は土坑覆土の最上部と考えられている。また、土坑SK-15は7層以下を掘り込んでいる。

試料は、上位より各層1点ずつ、計13点採取されている。重鉱物および火山ガラス比分析には、試料番号1から6までの試料を選択する。

2. 住居構築材の樹種

試料は、古墳時代後期(鬼高期)の住居跡(SI-17)から検出された柱材と考えられる炭化材1点である。

Ⅲ. 方法

1. 重鉱物分析

試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm~1/8mmの砂分をボリタングステート（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

2. 火山ガラス比分析

重鉱物分析の処理により得られた軽鉱物分を偏光顕微鏡下にて観察、火山ガラスとそれ以外の砕屑物250粒を計数し、砕屑物中における火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、便宜上軽鉱物にいれ、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

3. 住居構築材の樹種

試料を乾燥させたのち、木目（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の割断面を作製し、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。

Ⅳ. 結果

1. 重鉱物分析

結果を表1、図1に示す。斜方輝石と単斜輝石の両輝石は、試料番号2に極大層準が、試料番号6に極小層準が認められる。角閃石は、試料番号5に極大層準が認められる。カンラン石は、いずれの試料にも少量しか含まれないが、試料番号5付近にやや不明瞭であるが極大層準が認められる。

表1 上入野遺跡・重鉱物および火山ガラス比分析結果

| 試料番号 | カンラン石 | 斜方輝石 | 単斜輝石 | 角閃石 | 不透明鉱物 | その他 | 重鉱物同定粒数 | バブル型火山ガラス | 中間型火山ガラス | 軽石型火山ガラス | その他 | 軽鉱物同定粒数 |
|------|-------|------|------|-----|-------|-----|---------|-----------|----------|----------|-----|---------|
| 1 | 2 | 174 | 17 | 2 | 28 | 27 | 250 | 10 | 10 | 6 | 224 | 250 |
| 2 | 3 | 186 | 20 | 2 | 23 | 16 | 250 | 30 | 7 | 6 | 207 | 250 |
| 3 | 8 | 175 | 15 | 11 | 16 | 25 | 250 | 56 | 4 | 2 | 188 | 250 |
| 4 | 10 | 129 | 14 | 29 | 20 | 48 | 250 | 20 | 3 | 1 | 226 | 250 |
| 5 | 12 | 135 | 4 | 54 | 12 | 33 | 250 | 1 | 1 | 3 | 245 | 250 |
| 6 | 11 | 99 | 9 | 45 | 20 | 66 | 250 | 1 | 1 | 2 | 246 | 250 |
| 7 | 3 | 122 | 12 | 42 | 23 | 48 | 250 | 1 | 3 | 11 | 235 | 250 |
| 8 | 4 | 68 | 6 | 90 | 29 | 53 | 250 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

2. 火山ガラス比分析

結果を表1、図1に示す。試料番号1から4では、バブル型火山ガラスの特徴的な産状が認められる。下位よりみて、試料番号4から3で増加、試料番号3から1で減少する。その産出層準と形態からこのバブル型火山ガラスは始良Tn火山灰(AT; 町田・新井, 1976)に由来すると考えられる。ATは、鹿児島県の始良カルデラを起源とし、降灰年代は約2.1~2.5万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。一般に、土壌中に特定のテフラが混交して産出する場合、テフラ最濃集部の下限が降灰層準に一致する場合が多い(早津, 1988)。しかし、本分析では試料採取が各層準ごとであるため、テフラ最濃集部を明瞭には捉えられない。したがって、本地点におけるATの降灰層準は、おおむね試料番号3の採取層準の3層から試料番号4の採取層準の4層付近と考えられる。

また、試料番号1・2では、中間型火山ガラスと軽石型火山ガラスが下位よりもやや多く認められる。この火山ガラスは、その産出層準と形態および当社も含めたこれまでの分析例により、立川ローム層最上部ガラス質火山灰(UG; 山崎, 1978)に対比される可能性のあるテフラに由来すると考えられる。UGは、浅間火山の軽石流期のテフラの細粒部であると考えられており、その降灰年代は約1.2万年前とされている(町田・新井, 1992)。武蔵野台地の立川ローム層の標準層序におけるⅢ層上部が降灰層準と考えられ、南関東地方における後期更新世末の編年学的研究には重要な指標テフラとなっている。一方、UGの由来と考えられている浅間軽石流期のテフラは、浅間板鼻黄色テフラ(A s-Y P)やA s-Y Pと同一噴火輪廻のテフラと考えられている浅間草津テフラ(A s-K)などが主なものである(町田・新井, 1992)。なお、A s-Y Pの降灰年代は約1.3~1.4万年前と考えられている(町田・新井, 1992)。さらに、A s-K(引用文献中ではA s-Y P k)に対比されるテフラは、東北地方南部から中部でも認められている(小岩・早田, 1994)。また、UGに対比される可能性のあるテフラは、当社による分析例でも茨城県や栃木県内の多くの遺跡で認められている。しかし、本分析の産状からは、その降灰層準は推定できない。

3. 住居構築材の樹種

柱材と考えられる炭化材は、コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種に同定された。クヌギ節の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑 木本編(Ⅱ)」(北村・村田, 1979)に従い、一般的な性質などについては「木の辞典 第2巻」(平井, 1979)も参考にした。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科

環孔材で孔間部は1~3列、孔間外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものや複合放射組織とがある。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で、果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ(*Quercus acutissima* Carruthers)とアベマキ(*Q. variabilis* Blume)の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器只・杭材、櫓木などの用途が知られる。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材にはむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

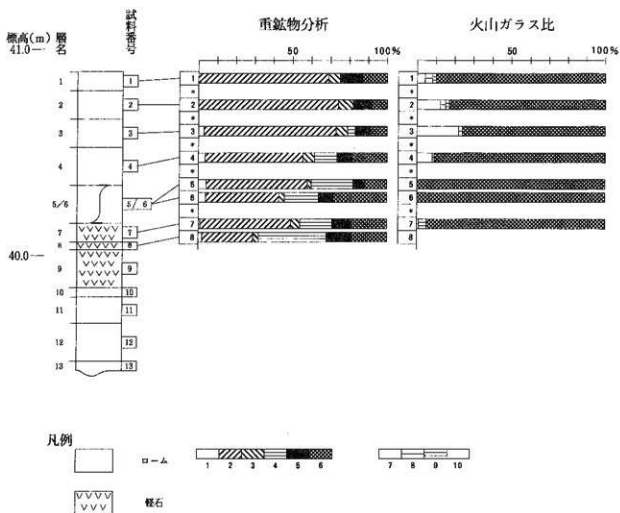


図1 上入野遺跡・重鉱物組成および火山ガラス比

- 1 : カンラン石, 2 : 斜方輝石, 3 : 単斜輝石, 4 : 角閃石, 5 : 不透明鉱物,
 6 : その他, 7 : バブル型火山ガラス, 8 : 中間型火山ガラス,
 9 : 軽石型火山ガラス, 10 : その他

V. 考察

1. ローム層序の確立

当社も含めたこれまでの分析例により、本地域の台地上のローム層上部の重要な指標テフラとしてUGに對比される可能性のあるテフラやATがある。ATの降灰層準は、田原ローム層と宝木ローム層の境界層の暗色帯の上部におかれ(町田・新井, 1976)、当社による分析例でも同様に認められている。今回の分析結果では、ATの降灰層準は3層から4層付近と考えられることから、1層および3層がおおむね田原ローム層、4層以下が宝木ローム層と考えられる。また、十坑SK-14および十坑SK-15はいずれもAT降灰以前に構築されたものといえる。

UGに對比される可能性のあるテフラの降灰層準は、当社も含めたこれまでの分析例により、ローム層の最上部であることが認められている。今回の分析結果では、その降灰層準は推定できなかったが、拡散が認められたため、1層はほぼローム層最上部であると考えられる。ただし、UGの降灰層準は1層よりさらに上位の可能性もある。

栃木県や茨城県の台地上のローム層の重鉱物組成の分析例は、これまでに阿久津(1957)や関東ローム研究グループ(1965)により報告されている。しかし、その量比の層位的变化の指標は、武蔵野台地ほど明瞭ではない。田原ローム層では斜方輝石が多く、他に磁鉄鉱、単斜輝石、少量の角閃石、カンラン石を含み、宝木ローム層のA₈-K_Pより上位では、角閃石を比較的多量に含み、少量のカンラン石を含むとされている(関東ローム研究グループ, 1965)。なお、磁鉄鉱は、本分析で「不透明鉱物」としたものに分類される。このなかでは、当社も含めたこれまでの分析例により、角閃石の量比の変化が指標になる。角閃石は、田原ローム層中には微量〜少量しか含まれないが、暗色帯上部付近において下位に向かって増加することが認められている。今回の分析結果においても、角閃石の量比が試料番号3から試料番号5の極大層準に向かって増加する。したがって試料番号3から5は、ほぼ暗色帯上部付近に對比される。これは、前述のATの降灰層準による層序対比の結果とほぼ整合する。

武蔵野台地の標準層序におけるATの降灰層準は、立川ローム層のBBⅡの上限付近であることがこれまでの分析例から知られている。したがって、本地点の1層から3層付近はほぼ武蔵野台地の立川ローム層のⅢ層からⅥ層に對比される。

今回の層序対比は、土壌中に含まれる指標テフラや鉱物の層位的変化を調べることににより、対比の指標を導き出している。この際に、試料採取の間隔が広すぎると層位的変化は非常に捉えにくくなるため、対比の指標が見いだせないことがある。したがって、試料は連続で採取することが望ましい。

ところで、ローム層(ここではいわゆる関東ローム層のような細粒の火山砕屑物を母材とする土壌をさすものとして用いる)の成因については、従来は小噴火による降下火山灰の累積したもの(たとえば町田(1964)など)とする説が主に支持されてきた。しかし、最近では、いったん堆積した火山灰が風によって移動させられて累積したものとする説が主張されるようになった。この説は、中村(1970)により提示され、早川(1986)、早川・山井(1989)、早川(1990)などにおいて火山学および火山灰編年学上の種々の観察事実を根拠として述べられている。当社では、これらの文献において展開されている論拠から、この説がかなり有力であると考えられる。この説に従えば、ローム層も黒ボク土層も火山の噴火とは関係なく常に降りつる風塵によって形成されたことになる。早川・山井(1989)に示されたその堆積速度の平均は約0.07mm/年程度であるから、ローム層が形成される過程をより短時間で捉えれば、地表面に降下した風塵が、そのまま落ちつくことはなく、風や降雨による再移動を繰り返したものと考えられる。また、ローム層の鉱物組成には、周辺火山の噴出物の鉱物

組成が反映されており、それは、同じ地域では類似すると考えられる。したがって、重鉱物組成による層序対比が有効となる。

以上のようなローム層の成因を考慮すると、本文で述べた層序対比は、各層準の層界を同一時間面として対比できる精度ではない。したがって、遺構や遺物の検出された層準の対比を議論する際には、このことに留意する必要がある。

2. 住居構築材の樹種

同定されたクヌギ節の木材は、これまでの調査結果から、古墳時代を中心として関東地方各地で住居構築材として利用されていたことが推定される。これまでの調査例では、住居構築材の中でも垂木と考えられる部材が多く、柱材が検出されている例は少ない。柱材の樹種同定を行った例では、埼玉県加須市水深遺跡でクヌギ節1点(山内, 1972)、茨城県牛久市ヤツノ上遺跡でクヌギ節2点、コナラ節1点(未公表)等が知られている。これらの結果から、茨城県や埼玉県では、クヌギ節が住居構築材の様々な部位に利用され、最も強度を必要とする柱材にも多く利用されていたことが推定される。

引用文献

- 阿久津 純 (1957) 宇都宮付近の関東ローム層. 地球科学, 33, p.1-11
- 新井 房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, 4, p.1-79.
- 早川由紀夫 (1986) 火山灰土の成因と堆積速度. 1986年度春季人会日本火山学会講演予稿集, p.34.
- 早川由紀夫 (1990) 堆積物から知る過去の火山噴火. 火山第2集, 34, 火山学の基礎研究特集号, p.S121-S130.
- 早川由紀夫・由井将雄 (1989) 草津白根火山の噴火史. 第四紀研究, 28, p.1-17.
- 早津 賢治 (1988) テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー—ATにまつわる議論に關係して—. 考古学研究, 34, p.18-32.
- 平井 信二 (1979) 木の事典 第2巻. かなえ書房.
- 関東ローム研究グループ (1965) 関東ローム—その起源と性状—. 378 p., 築地書館.
- 北村 四郎・村田 源 (1979) 原色日本植物図鑑 木本編(Ⅱ), 545 p., 保育社.
- 小岩 直人・早田 勉 (1994) 東北地方中南部に分布する更新世末期のガラス質テフラ. 地学雑誌, 103, p.68-76.
- 町田 洋 (1964) Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史—第四紀末期について—(その1)(その2). 地学雑誌, 73, p.293-308, 337-350.
- 町田 洋・新井 房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井 房夫 (1992) 火山灰アトラス. 276 p., 東京大学出版会.
- 中村 一明 (1970) ローム層の堆積と噴火活動. 軽石学雑誌, 3, p.1-7.
- 坂本 亨・田中 啓策・曾屋 龍典・野間 泰二・松野 久也 (1972) 那珂湊地域の地質 地域地質研究報告 5 万分の1図幅 東京(8) 第11号, p.94., 地質調査所.
- 山内 文 (1972) 自然遺物. 東北縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告I「水深」, p.211-214, 日本道路公団・埼玉県遺跡調査会.
- 山崎 晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動. 第四紀研究, 16, p.231-246.

第2章 青木遺跡

I. はじめに

青木遺跡は、東茨城台地北部の那珂川支流の藤井川と前沢川に挟まれた上入野台地東端部付近に立地する。隣接して上入野遺跡がある。発掘調査により、縄文時代～中・近世にわたる遺構・遺物が確認されている。とくに、古墳時代から奈良・平安時代の集落は、上入野遺跡の集落との関連性が指摘されている。そのほか、中世の城館に伴うと考えられる堀が検出されている。

今回の自然科学分析調査では、古墳時代（鬼高期）の住居跡および平安時代の土器捨て場からそれぞれ検出された種実遺体について、その種類を知り、植物利用に関する検討を行う。

II. 試料

試料は、古墳時代の住居跡（SI-4）および平安時代の上器捨て場（SI-13）から検出された種実遺体である。点数は、JAO SK-198 西ベルトNa1566X、JAO SK-198 南ベルトNa1527X、JAO SK-198 Na1615X、JAO SK-198 4区、JAO SI-4 カマド内の計5点である。

III. 方法

双眼顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定した。

IV. 結果

いずれの試料もモモに同定された。以下に形態的特徴について記す。

・モモ *Prunus persica* Batsch バラ科サクラン属

核（内果皮）が検出された。完形のものにはJAO SK-198 南ベルトNa1527Xのみであり、他は破片である。完形のもの、褐色で大きさ約2cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。一方の側面にのみ縫合線が顕著に見られ、表面は不規則な線状のくぼみがあり全体としてあらいしわ状に見える。

V. 考察

モモは栽培の為に渡来した植物といわれている。モモは古くから人々に利用され、花の観賞や果実や種子を食用にする。当時本遺跡でも利用されていたと考えられる。モモは、古くは縄文時代前期に検出例が知られているが（長崎県伊木力遺跡；粉川，1988）、検出例・団体数が増加するのは弥生時代以降である。モモの品種は非常に多く、江戸時代には花の鑑賞用モモは約200種類以上、果实用でも40種類以上あったといわれている（編田，1980）。江戸時代以前に食べられていたとされる古い形質のモモの核は、小さくて丸みがあるといわれており（編田，1980）、今回の形態もこれに近い。遺跡から出土したモモの形態分類に関しては、金原（1993）などが系統的に行っているが、まだ事例は少なく時代をおっての形質の変化等は今後の課題である。

引用文献

- 編田 満（1980）モモ・ピワ、「植物の生活誌」p.136-142. 平凡社。
金原 正明・粉川 昭平・太田 三喜（1992）モモ核を中心とする古代有用植物の変遷、日本文化財科学会第

9回大会研究発表要旨集, p.76-77.

粉川 昭平 (1988) 穀物以外の植物食. 『弥生文化の研究 2 生業』, 金関 恕・佐原 眞編, p.112-115 .,
雄山閣.

第3章 前側遺跡

I. はじめに

前側遺跡は、東茨城台地北部の那珂川支流の藤井川と前沢川に挟まれた上入野台地のほぼ中央部に立地する。発掘調査により、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出されている。同じ台地上に立地する上入野遺跡・青木遺跡・仲郷遺跡・後側遺跡などの調査により、この時代には本台地上にはかなりの規模の集落が営まれていたことが推定されており、本遺跡もこれらの集落との関連が考えられている。

今回の自然科学分析調査では、奈良・平安時代の住居構築材の用材選択について検討するために、住居跡から検出された炭化材の樹種同定を行う。その結果と周辺の遺跡におけるこれまでの分析例との比較を行う。

II. 試料

試料は、奈良・平安時代の住居跡(SI-1)から検出された、住居構築材と考えられる炭化材5点(No.1~5)である。

III. 方法

試料を乾燥させたのち、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の断面を製作し、走査型電子顕微鏡(無蒸着・反射電子検出型)で観察・同定した。

IV. 結果

炭化材は、モミ属の一種、コナラ属アカガシ亜属の一種、シイノキ属の一種、エノキ属の一種に同定された(表2)。各種類の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。なお、和名・学名等は、主として「原色日本植物図鑑 木本編〈Ⅱ〉」(北村・村田, 1979)に従い、一般的性質などについては「木の辞典 第2巻~第5巻」(平井, 1979-1980)も参考にした。

・モミ属の一種 (*Abies* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞嚢は粗く、じょうず状末端壁が認められる。分隔壁孔はスギ型で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

モミ属には、モミ (*Abies firma* Sieb. et Zucc.)、ウラジロモミ (*A. homolepis* Sieb. et Zucc.)、アオモリトドマツ (*A. mariesii* Masters)、シラベ (*A. veitchii* Lindley)、アカトドマツ (*A. sachalinensis* (Fr. Schmidt) Masters) の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地~山地に、ウラジロモミは本州中部(福島県以南)・紀伊半島・四国の山地~亜高山帯に、アオモリトドマツは本州(福島県以北)の亜高山~高山帯に、シラベは本州中部(福島県以南)・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地~高山・寒冷地に生育する。モミの材はやや軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

・コナラ属アカガシ亜属の一種 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸~厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、

表2 前側遺跡・炭化材同定結果

| 番号 | 検出遺構 | 用途 | 時代 | 樹種名 |
|----|------|---------------|---------|---------------|
| 1 | SI-1 | 住居構築材 (ホゾ穴有り) | 奈良・平安時代 | エノキ属の一種 |
| 2 | SI-1 | 住居構築材 | 奈良・平安時代 | コナラ属アカガシ亜属の一種 |
| 3 | SI-1 | 住居構築材 | 奈良・平安時代 | モミ属の一種 |
| 4 | SI-1 | 住居構築材 | 奈良・平安時代 | モミ属の一種 |
| 5 | SI-1 | 住居構築材 | 奈良・平安時代 | シノキ属の一種 |

壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと同放射組織とがある。年輪界は不明瞭。

アカガシ亜属 (カシ類) には、アカガシ (*Quercus acuta* Thunberg)、イチイガシ (*Q. gilva* Blume)、アラカシ (*Q. glauca* Thunberg) など7種があるが、果実の構造からコナラ亜属に分類される常緑低木～小高木のウバメガシ (*Q. phylliraeoides* Asa Gray) も、材構造上はカシ類と類似する。カシ類は、暖温帯常緑広葉樹林 (いわゆる照葉樹林) の主要な構成種であり、主として西南日本に分布する。このうち最も高緯度地域にまで分布するのがアカガシで、宮城・新潟県が北限である。材は重硬・強靱で、器具・機械・建築・薪炭材などに用いられる。

・シノキ属の一種 (*Castanopsis* sp.) ブナ科

環孔材→放射孔材で孔間部は3～4列、孔間外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。年輪界は明瞭。

シノキ属には、ツブラジイ (コジイ) (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky) とその変種スタジイ (*C. cuspidata* var. *siboldii* (Makino) Nakai) がある。いずれもカシ類とともに、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。ツブラジイは本州 (伊豆半島以南)・四国・九州に、スタジイは本州 (福島・新潟県以南)・四国・九州・琉球に分布し、また植栽される高木である。一般には、スタジイが沿海地、ツブラジイが内地地に生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はやや容易、耐朽性は中程度～低い。材質的にはツブラジイはスタジイより劣るものとされている。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。

・エノキ属の一種 (*Celtis* sp.) ニレ科

環孔材で孔間部は1～3列、孔間外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互上に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～15細胞幅、1～50細胞高で精細胞をもつ。年輪界は明瞭。

エノキ属にはエゾエノキ (*Celtis jzoensis* Koidzumi)、エノキ (*C. sinensis* Persoon)、コバノチョウセンエノキ (*C. biondii* Pampanini)、クワノハエノキ (*C. boninensis* Koidzumi) の4種がある。エゾエノキとエノキは、本州・四国・九州に普通にみられる。コバノチョウセンエノキは本州 (近畿地方以西)・四国・九州・琉球に、クワノハエノキは山口県・九州西部・琉球・小笠原に希に生育する。エノキの材はやや重硬で、強度はやや小さい。耐久性も低く、材質的に劣るため、難用材・薪炭材などの用途があるだけである。

V. 考察

住居構築材と考えられる炭化材には、3種類の木材が認められた。このうちアカガシ亜属の県内における山上例を見ると、白石遺跡や諏訪遺跡（嶋倉，1980）等沿海地の奈良・平安時代の住居跡からのものが多い。これらの結果から、沿海地と内陸部とで植生が異なっていたことや、時代によって選択される木材が異なっていたことなどを指摘してきた。

本遺跡は、これまでアカガシ亜属が検出された遺跡と比較すると、やや内陸部に位置する。周辺では、近接する上入野遺跡で古墳時代後期の柱材にクヌギ節が認められており、古墳時代にはクヌギ節が柱材として用いられることがあったことを示している。構築材として用いる木材の大きさや重さを考慮すれば、木材は比較的遺跡周辺で入手していたことが推定される。このことから、少なくとも奈良・平安時代において本遺跡周辺でアカガシ亜属やシイノキ属等のいわゆる照葉樹の入手が可能であったと考えられる。近接する遺跡間において、古墳時代と奈良・平安時代で住居構築材の樹種が異なる結果となっているが、これが植生の違いであるのか用材選択の違いであるのかは断定できない。また、住居構築材が特定の樹種を選択していたのではないことも考えられる。すなわち、構築材として適当な強度、大きさ（径・長さ）、形状を有していれば、あらゆる木材を使用していた可能性もある。銚田町平出久保遺跡から得られた古墳時代の住居構築材の樹種同定結果もその可能性を支持するものである。これらの問題点をさらに検討するためには、現時点で得られた資料数では十分でなく、今後さらに調査を行うことが必要である。また、1軒の住居跡における樹種構成を正確に把握することも必要であり、検出された炭化材について位置を記録した上で可能な限り多くの点数について樹種同定を行うことが望まれる。また、それに併せて当時の周辺植生に関する検討も進めなければならない。

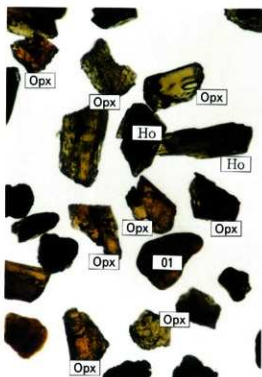
引用文献

- 平井 信二（1979-1980）木の事典 第2巻～第5巻，かなえ書房。
北村 四郎・村田 源（1979）原色日本植物図鑑 木本編〈Ⅱ〉，545 p.，保育社。
嶋倉 巳三郎（1980）日立市諏訪遺跡出土木炭の樹種について。「諏訪遺跡」，p.188，日立市教育委員会。

図版1 上入野遺跡・重鉱物および火山ガラス



1. 重鉱物 (試料番号 2)



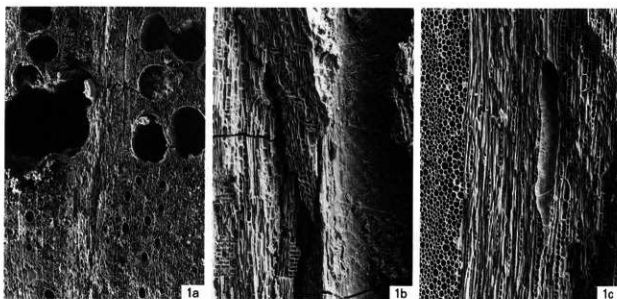
2. 重鉱物 (試料番号 6)



3. AT火山ガラス (試料番号 3)

01: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, Ho: 角閃石.

図版2 上入野遺跡・炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (SI-17)

a : 木口, b : 径目, c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

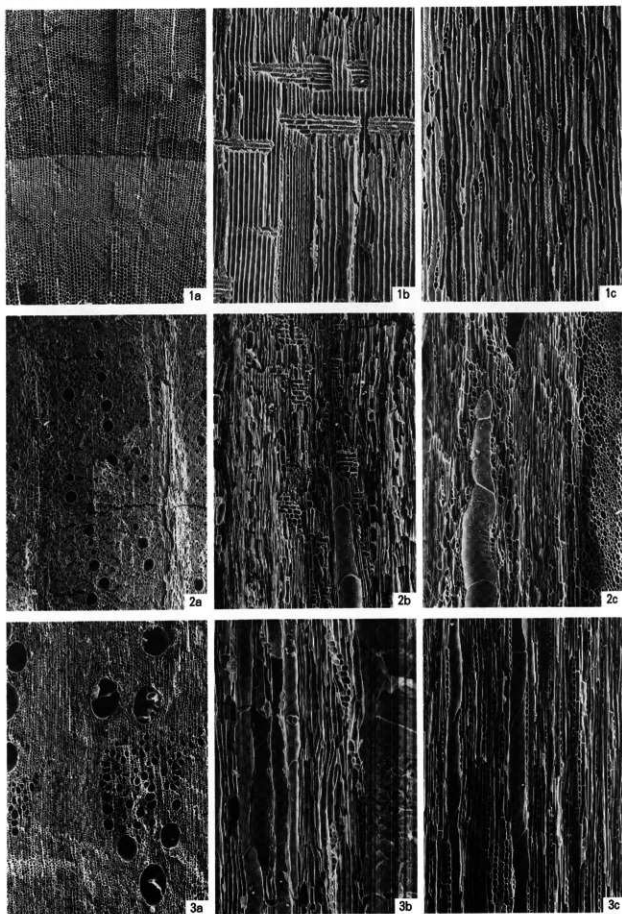
図版3 青木遺跡・種実遺体



モモ (SK-198 南ベルト No.1527X)

1 mm

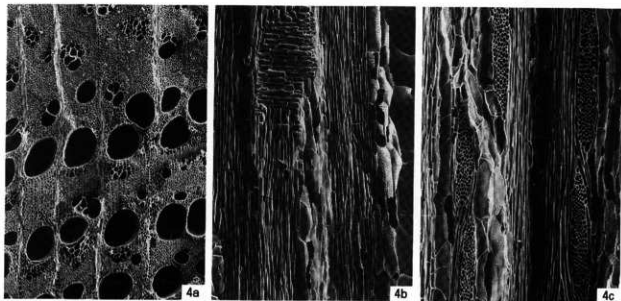
図版4 前側遺跡・炭化材(1)



1. モミ属の一種 (No. 3)
 2. コナラ属アカガシ亜属の一種 (No. 2)
 3. シイノキ属の一種 (No. 5)
- a : 木口, b : 柃目, c : 板目

200 μm : a
200 μm : b, c

図版5 前倒遺跡・炭化材(2)



4. エノ属の一種 (No. 1.)

a : 木口, b : 砦目, c : 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

写 真 图 版



遺跡全景

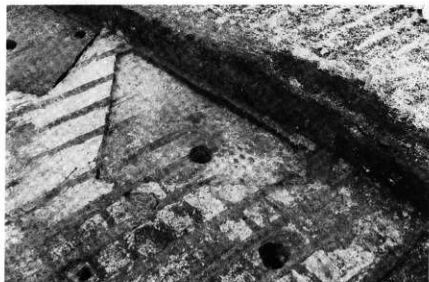


2区調査終了風景

上入野遺跡 PL 2



第4号住居跡



第5号住居跡



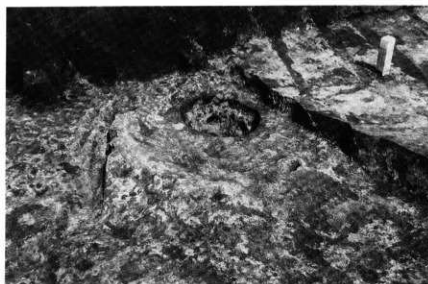
第6号住居跡



第7号住居跡竈



第8号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡出入り口部



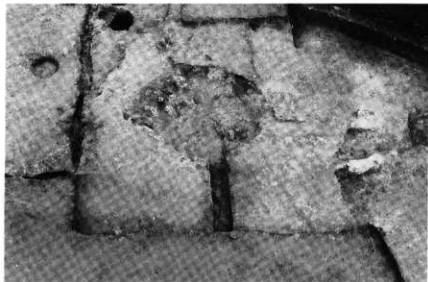
第10号住居跡



第11号住居跡



第15号住居跡



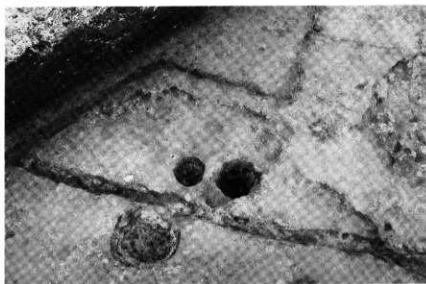
第16号住居跡



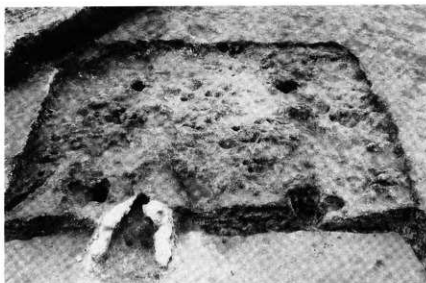
第17号住居跡



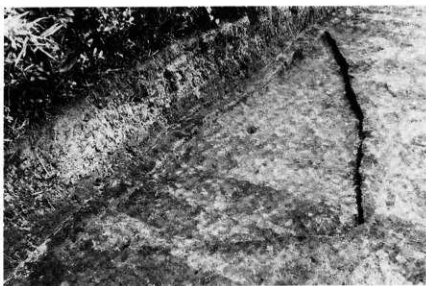
第17号住居跡遺物出土状況



第18号住居跡



第19号住居跡



第20号住居跡



第1号土坑遺物出土状況



第9号土坑



第13号土坑土層セクション



第14・15・16号土坑



第14・15号土坑



第16号土坑



SI 5-1



SI 5-2



SI 7-1



SI 7-2



SI 7-7



SI 8-1



SI 7-3



SI 7-8



SI 8-2



SI 7-4



SI 7-9



SI 8-3



SI 7-5



SI 7-10



SI 8-4



SI 7-6



SI 7-12



SI 8-5



SI 7-13



SI 9-1



SI 9-2



SI 10-1



SI 10-2



SI 10-3



SI 10-4



SI 10-5



SI 10-6



SI 10-7



SI 10-8



SI 10-9



SI 10-10



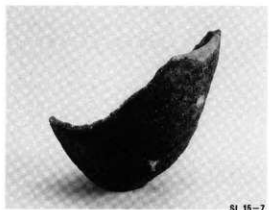
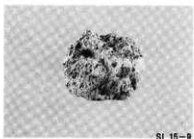
SI 10-11



SI 10-12



SI 10-13



上入野遺跡 PL12



SI 17-1



SI 17-6



SI 17-8



SI 17-2



SI 17-7



SI 17-12



SI 17-3



SI 17-9



SI 17-15



SI 17-4



SI 17-10



SI 17-5



SI 17-11



SI 17-17



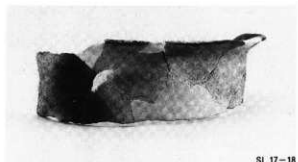
SI 17-13



SI 17-14



SI 17-16



SI 17-18



SI 17-19



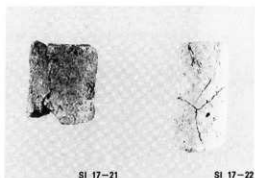
SI 17-20



SI 17-24



SI 17-25

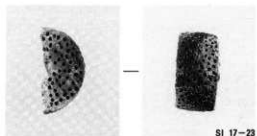


SI 17-21

SI 17-22



SI 17-26



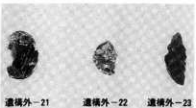
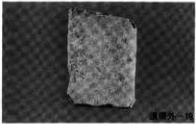
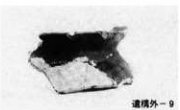
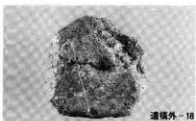
SI 17-23



SI 19-1



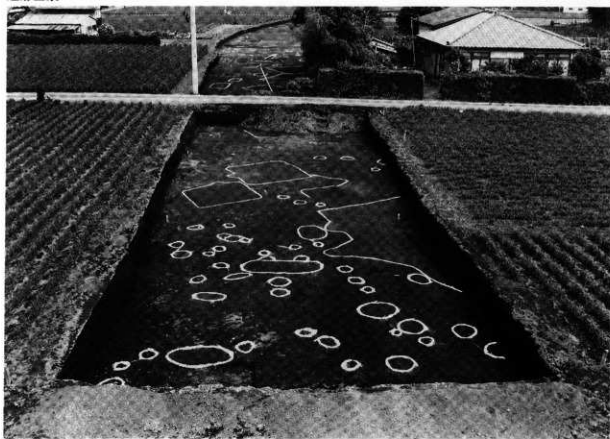
SI 19-2



第19・20号住居跡，第1号土坑，遺構外出土遺物



遺跡全景



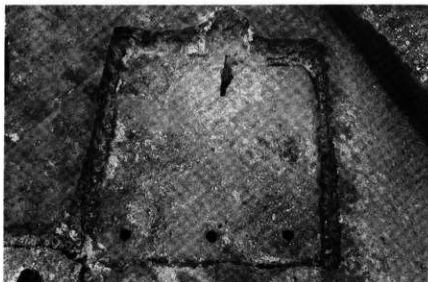
遺構確認状況



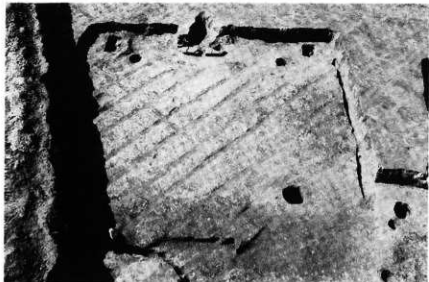
第1号住居跡



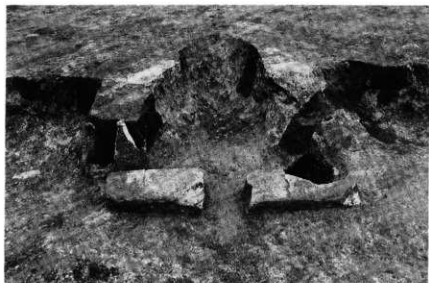
第4号住居跡



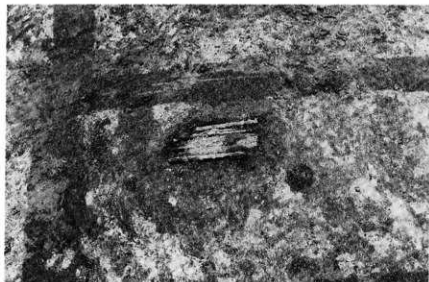
第9号住居跡



第11号住居跡竈



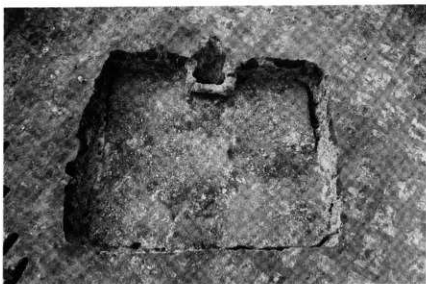
第11号住居跡竈



第11号住居跡鉄鏝出土状況



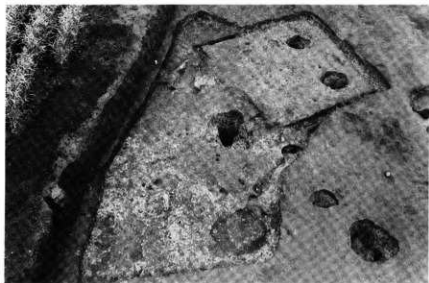
第12号住居跡



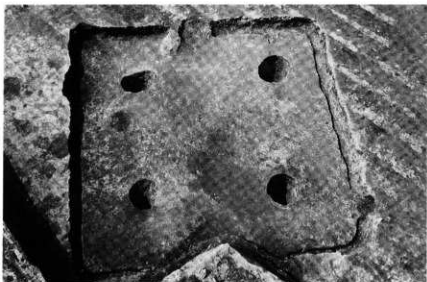
第23号住居跡



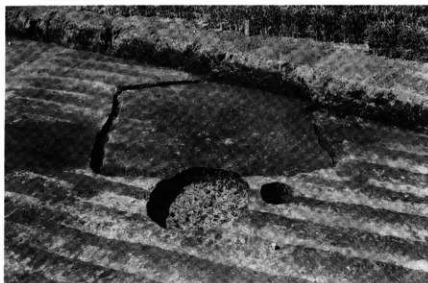
第23号住居跡竈遺物出土状況



第25A・25B・25C号住居跡



第29号住居跡



第30号住居跡



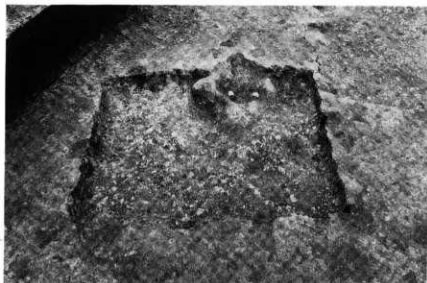
第40号住居跡



第41号住居跡



第42号住居跡



第45号住居跡



第46・48号住居跡



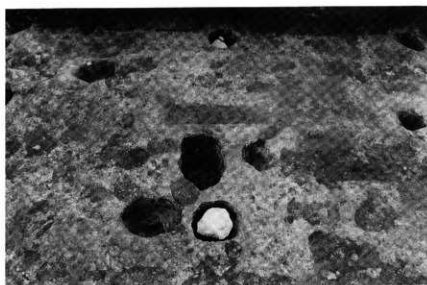
第1号ピット群



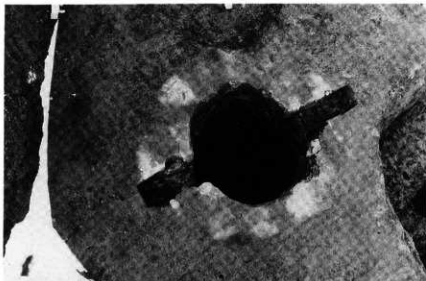
第2号ピット群



第3号ピット群



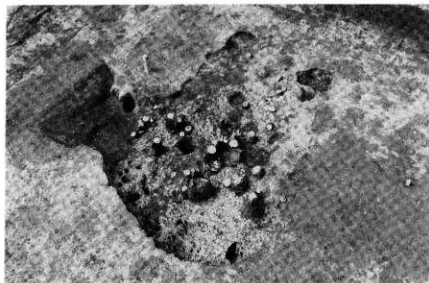
第3号ピット群根固め石
出土状況



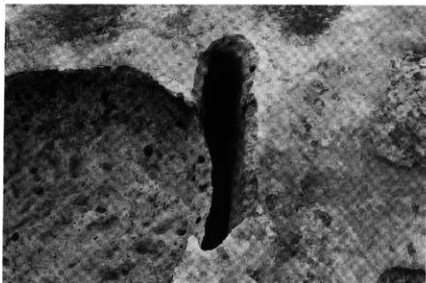
第36号土坑



第56号土坑



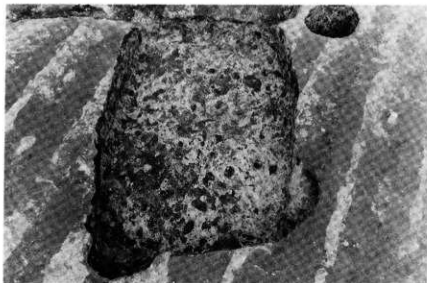
第125号土坑遺物出土状況



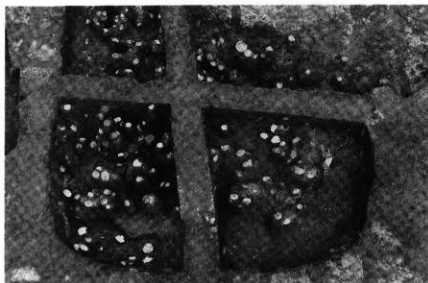
第129号土坑



第133号土坑



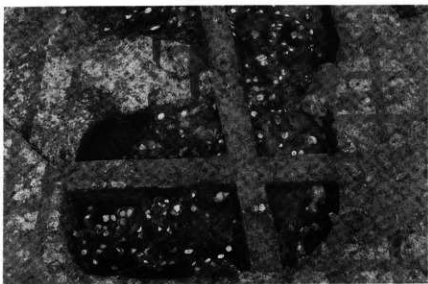
第142号土坑



第198・199号土坑遺物出土状況



第198号土坑
種実(毛毛)出土状況



第200号土坑遺物出土状況



第200号土坑遺物出土状況



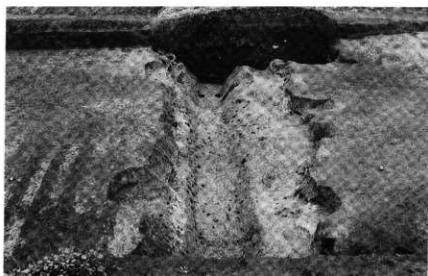
第200号土坑
土層セクション (東から)



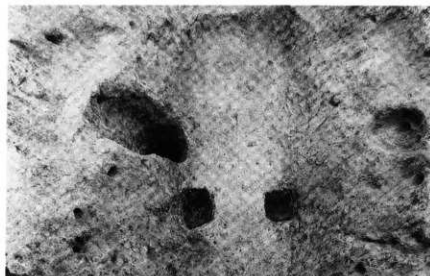
第198・199・200号土坑



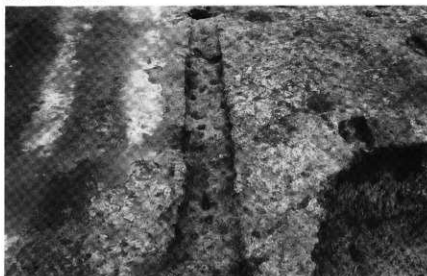
第1号地下式墳



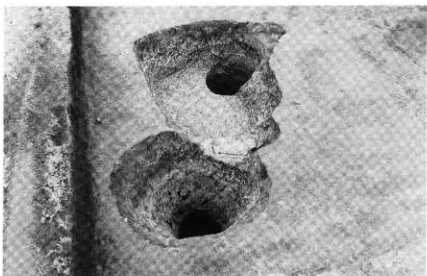
第1号堀



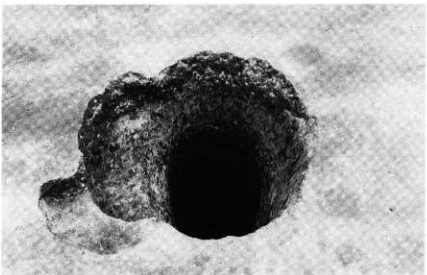
第1号堀南端部ビット群



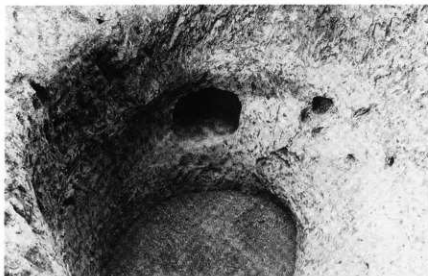
第2号溝



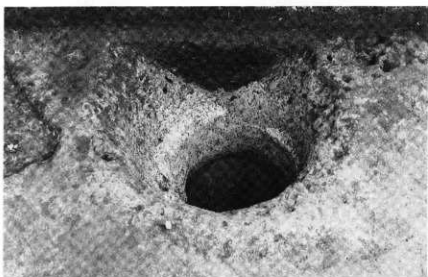
第2・5号井戸，第4号土坑



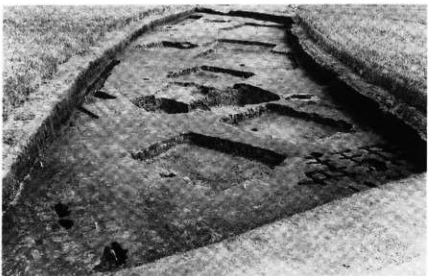
第3号井戸



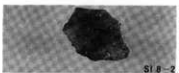
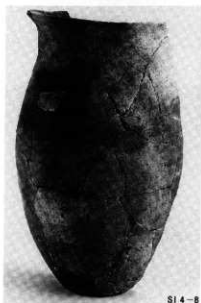
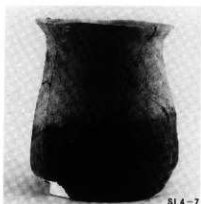
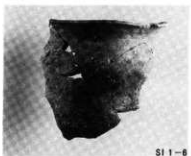
第4号井戸中位の構穴



第4号井戸



1区調査終了風景





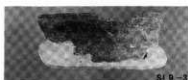
SI 9-1



SI 9-14



SI 11-5



SI 9-3



SI 9-15



SI 11-6



SI 9-4



SI 9-11



SI 11-1



SI 11-4



SI 9-12



SI 11-2



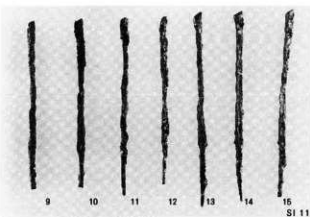
SI 9-13



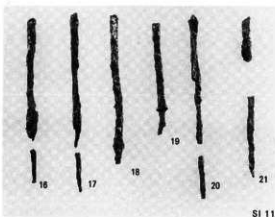
SI 11-3



SI 11-8



9 10 11 12 13 14 15 SI 9



16 17 18 19 20 21 SI 11



SI 12-1



SI 12-2



SI 17-1



SI 17-2



SI 17-3



SI 19-2



SI 20-4



SI 19-3



SI 18-1



SI 20-5



SI 23-2



SI 21-3



SI 23-3



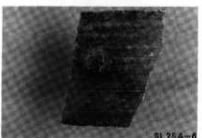
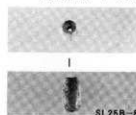
SI 21-4



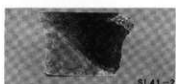
SI 23-4

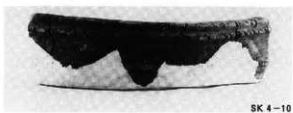
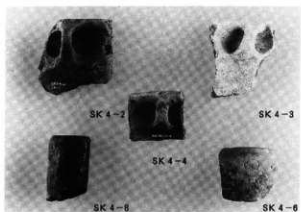
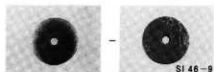


SI 23-1

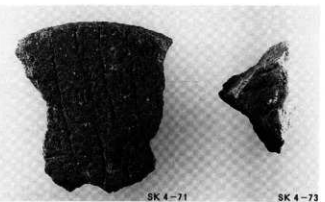
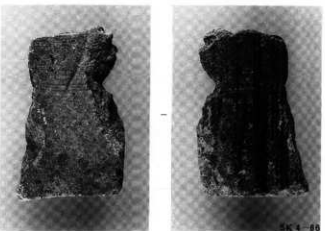
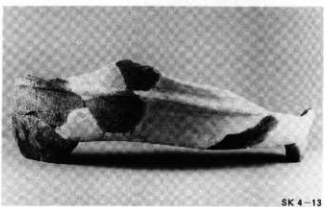
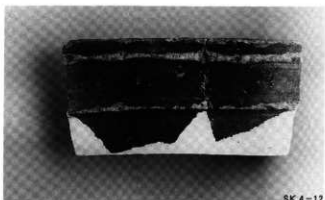
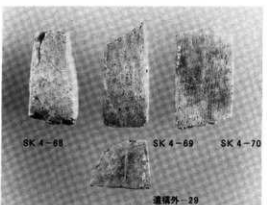


第25A・25B・25C・28・30・32・34号住居跡出土遺物





第46・48・49・51・52号住居跡，第4号土坑出土遺物





上 SK 4-17 SK 4-22 下 SK 4-21 SK 4-19



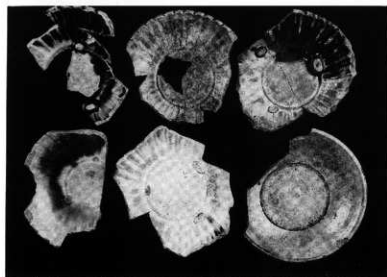
上 SK 4-23 下 SK 4-24



上 SK 4-46 SK 4-48 SK 4-47 下 SK 4-62 SK 4-58 SK 4-63



上 SK 4-44 下 SK 4-30



上 SK 4-51 SK 4-55 SK 4-53 下 SK 4-54 SK 4-50 SK 4-39



SK 4-61

青木遺跡 PL38



SK 36-1



SK 36-2



SK 36-3



SK 36-4



SK 124-1



SK 124-2



SK 124-3



SK 125-1



SK 125-2



SK 125-3



SK 125-4



SK 125-5



SK 125-6



SK 125-7



SK 125-9



SK 125-10



SK 125-12



SK 125-13



SK 133-1



SK 133-3



SK 133-4



SK 142-3



SK 198-5



SK 198-25



SK 142-4



SK 198-11



SK 198-26



SK 198-1



SK 198-14



SK 198-27



SK 198-2



SK 198-15



SK 198-28



SK 198-3



SK 198-17



SK 198-20



SK 198-4



SK 198-24



SK 198-31

青木遺跡 PL40



SK 198-32



SK 198-40



SK 198-51



SK 198-33



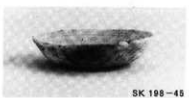
SK 198-41



SK 198-52



SK 198-34



SK 198-45



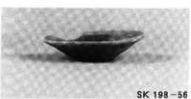
SK 198-54



SK 198-35



SK 198-46



SK 198-56



SK 198-36



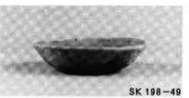
SK 198-47



SK 198-57



SK 198-37



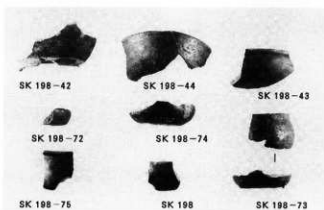
SK 198-49



SK 198-59



SK 198-38



SK 198-42

SK 198-44

SK 198-43

SK 198-72

SK 198-74

SK 198-73

SK 198-76

SK 198

SK 198-73



SK 198-39



SK 198-60



SK 198-67



SK 198-79



SK 198-61



SK 198-68



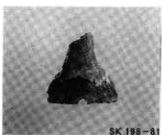
SK 198-80



SK 198-63



SK 198-69



SK 198-81



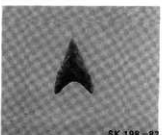
SK 198-66



SK 198-76



SK 198-71



SK 198-82



SK 198-77



SK 198-70



SK 199-1



SK 198-78



SK 199-2

青木遺跡 PL42



SK 199-3



SK 199-5



SK 199-6



SK 199-10



SK 199-11



SK 199-12



SK 199-14



SK 199-16



SK 199-17



SK 199-18



SK 199-19



SK 199-20



SK 199-21



SK 199-22



SK 199-25



SK 199-26



SK 199-27



SK 199-29



SK 199-30



SK 199-31



SK 199-32



SK 199-33



SK 199-34



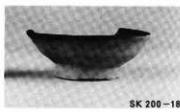
SK 199-35



SK 199-36



SK 200-9



SK 200-18



SK 200-1



SK 200-10



SK 200-19



SK 200-2



SK 200-11



SK 200-20



SK 200-4



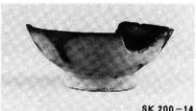
SK 200-13



SK 200-21



SK 200-5



SK 200-14



SK 200-23



SK 200-7



SK 200-15



SK 200-24



SK 200-8



SK 200-17



SK 199-26

青木遺跡 PL44



SK 200-27



SK 200-41



SK 200-55



SK 200-32



SK 200-42



SK 200-34



SK 200-43



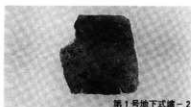
第1号地下式竈-1



SK 200-35



SK 200-45



第1号地下式竈-2



SK 200-36



SK 200-46



1



SK 200-37



SK 200-49



第1号地下式竈-3



SK 200-38



SK 200-50



第1号竈-1



SK 200-40

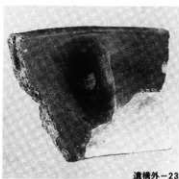
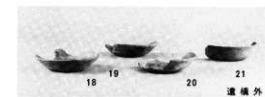
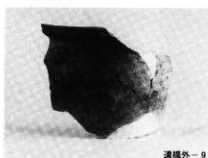


SK 200-53

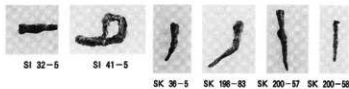
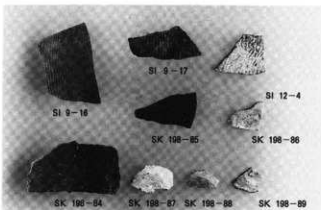
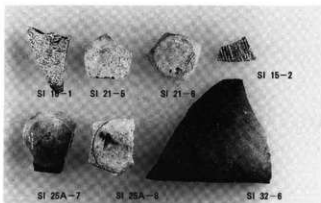
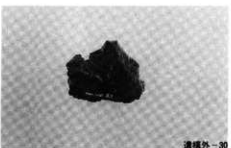
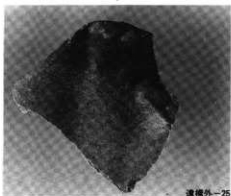


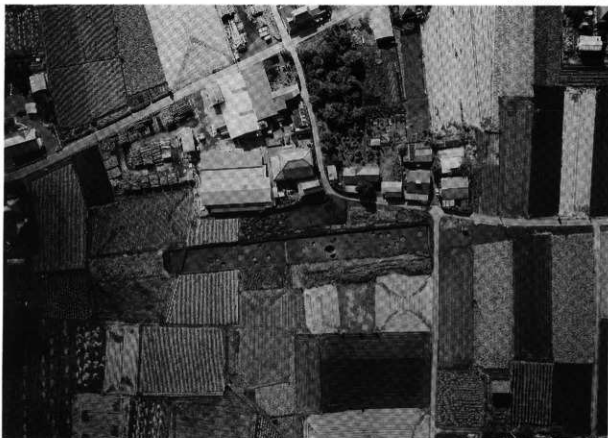
第1号竈-2

第200号土坑，第1号地下式竈，第1号掘出土遺物

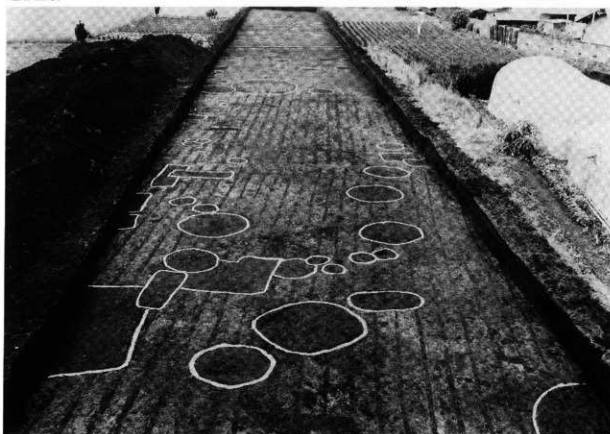


第1号堀，第2・5号井戸，遺構外出土遺物

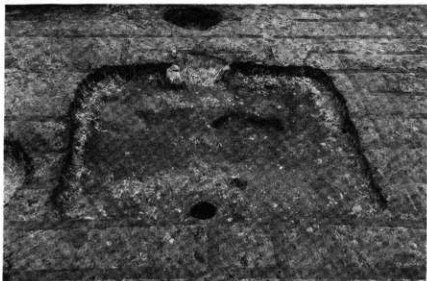




遺跡全景



遺構確認状況



第2号住居跡



第2号住居跡遺物出土状況



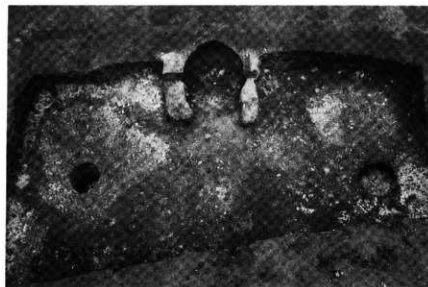
第2号住居跡
離遺物出土状況



第3・4号住居跡

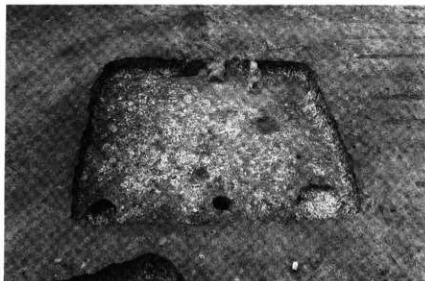


第4号住居跡
竈遺物出土状況



第4号住居跡竈

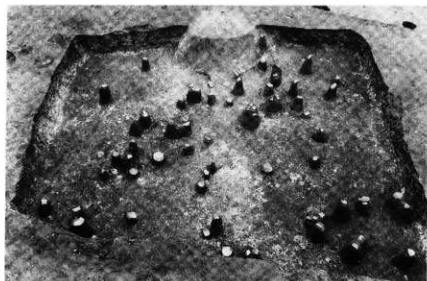
後側遺跡 PL50



第5号住居跡



第6号住居跡



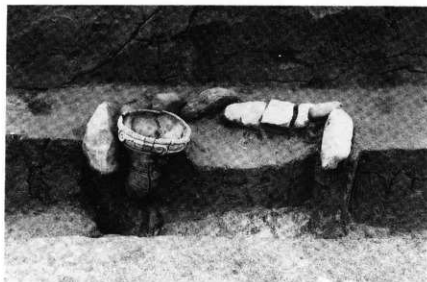
第6号住居跡遺物出土状況



第8号住居跡



第8号住居跡炉



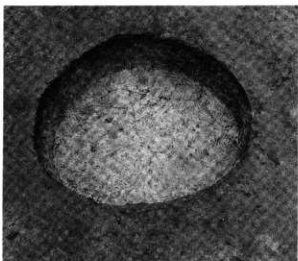
第8号住居跡
炉・床下土層セクション



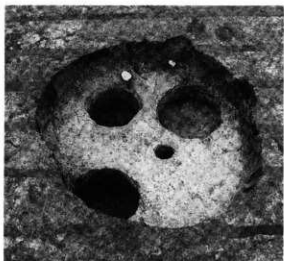
第11・12号土坑



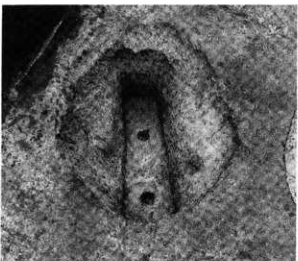
第17号土坑



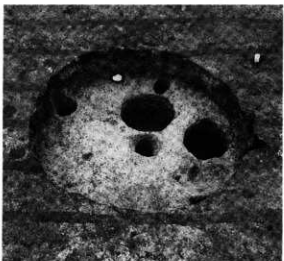
第13号土坑



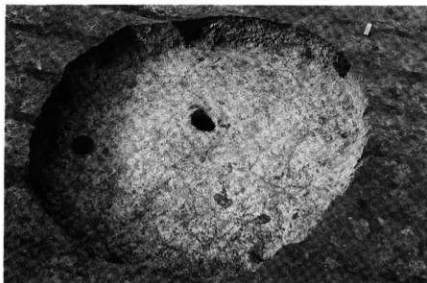
第45号土坑



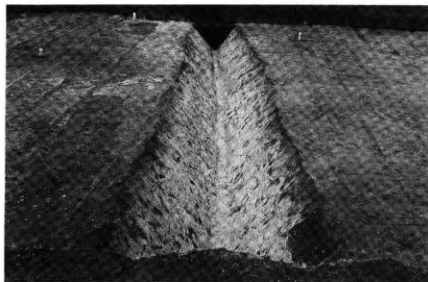
第14号土坑



第46号土坑



第53号土坑



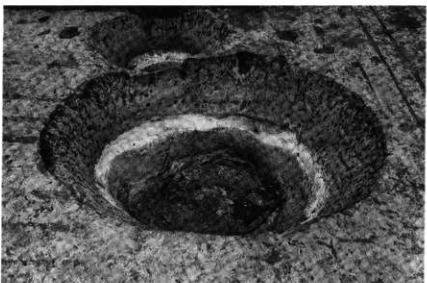
第1号溝



第2号溝



第1号井戸



第2号井戸



調査終了風景



SI 1-1



SI 1-2



SI 1-3



SI 1-4



SI 2-6



SI 2-2



SI 2-7



SI 2-9



SI 2-4



SI 2-10



SI 2-8



SI 2-11



SI 2-1



SI 2-3

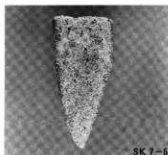
後側遺跡 PL56



第2・3・4号住居跡出土遺物



後側遺跡 PL58



第8号住居跡，第7・15・17・39・45・50号土坑，第2号溝出土遺物



SD 1-1



SD 1-2



SD 1-3



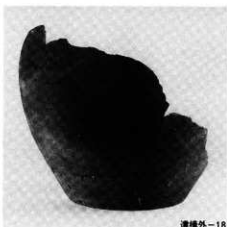
SD 2-1



遺構外-16



SD 2-4



遺構外-18



遺構外-24



SD 2-5



遺構外-28



SE 1-2



遺構外-17



遺構外-30



SE 2-1



遺構外-11



遺構外-32



遺構外-31

第1・2号溝，第1・2号井戸，遺構外出土遺物

後側遺跡 PL60



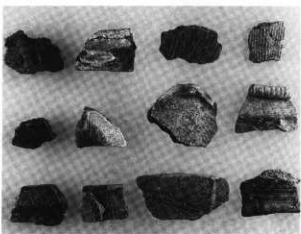
SI 4-9 SI 5-8 SI 5-9 SI 5-10
 SI 5-11 SI 5-12 SI 6 SI 8-1
 SI 8-2 SI 8-3 SI 8-4 SK 6-1



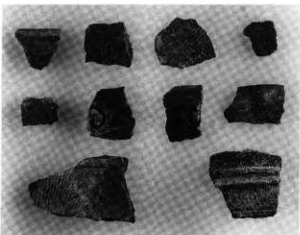
SK 45-2 SK 45-1 SK 46-2
 SK 46-1 SK 46-3 SK 46-4 SK 46-5
 SK 50-2 SK 50-3 SK 50-6 SK 50-4



SK 6-2 SK 6-3 SK 7-4 SK 7-1
 SK 7-3 SK 7-2 SK 11-1 SK 11-3
 SK 11-2 SK 11-4 SK 13-2 SK 13-1



SK 50-5 SK 53-1 SK 53-3 SK 53-4
 SK 53-2 SD 2-6 遺構外-11 遺構外-3
 遺構外-10 遺構外-1 遺構外-8 遺構外-6



SK 13-3 SK 13-5 SK 13-4 SK 13-6
 SK 13-7 SK 15-3 SK 15-2 SK 15-4
 SK 15-6 SK 15-5

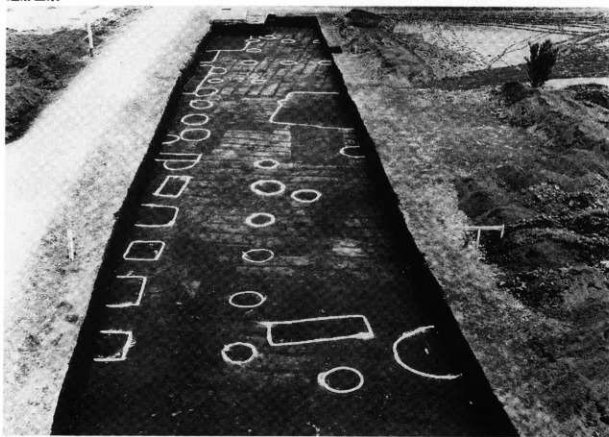


遺構外-15 遺構外-12 遺構外-14 遺構外-2
 遺構外-7 遺構外-13 遺構外-4
 遺構外-5

遺構外, その他の出土遺物



遺跡全景



遺構確認状況

前側遺跡 PL62



第1号住居跡
炭化材出土状況



第1号住居跡
ほぞ穴のある炭化材出土状況



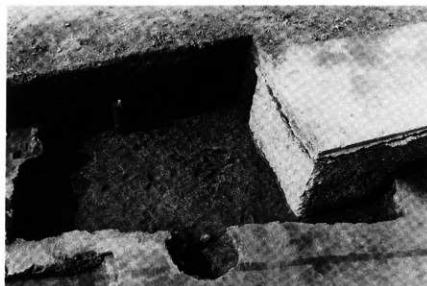
第2号住居跡遺物出土状況



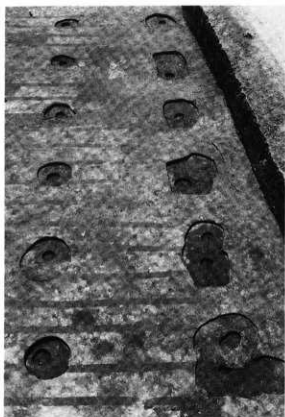
第3号住居跡



第3号住居跡
竈支脚出土状況



第4号住居跡



第1号掘立柱建物跡
遺構確認状況



第2号掘立柱建物跡
遺構確認状況



第3・4号掘立柱建物跡
遺構確認状況



SI 2-1



SI 2-2



SI 2-3



SI 2-4



SI 2-5



SI 2-6



SI 3-1



SI 3-2



SI 3-3



SI 3-4



SI 3-5



SI 3-7



SI 3-8



SI 3-9



SI 3-10



SI 3-11



SI 3-12

前側遺跡 PL66



第4号住居跡，第1・3・4号掘立柱建物跡，遺構外出土遺物



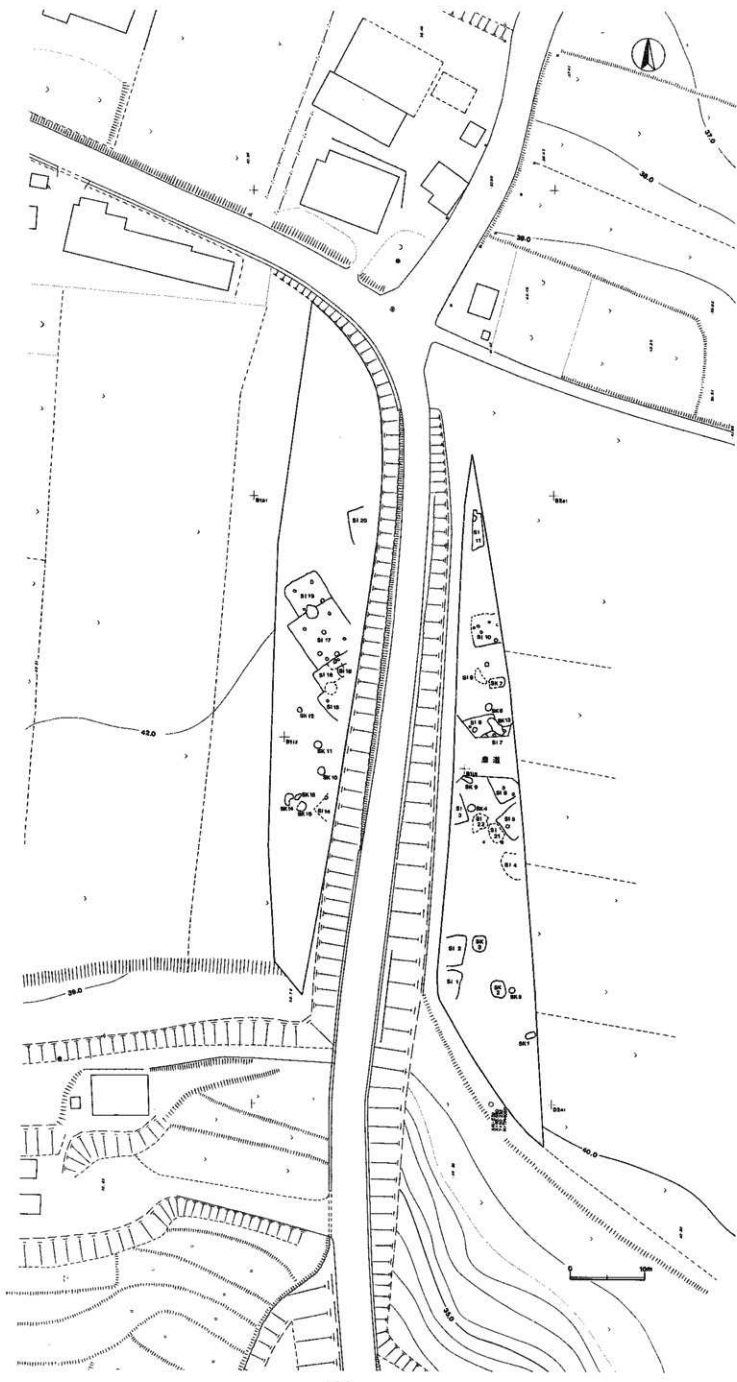
茨城県教育財団文化財調査報告第108集
主要地方道水戸茂木線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書 I

上 入 野 遺 跡
青 木 遺 跡
後 側 遺 跡
前 側 遺 跡

平成 8 (1996) 年 3 月 24 日印刷

平成 8 (1996) 年 3 月 31 日発行

発 行 財団法人 茨城県教育財団
〒310 水戸市見和 1 丁目356番地の 2
T E L 029-225-6587
印 刷 株式会社 三栄印刷
〒311-41 水戸市谷津町 1 50
T E L 029-252-6501



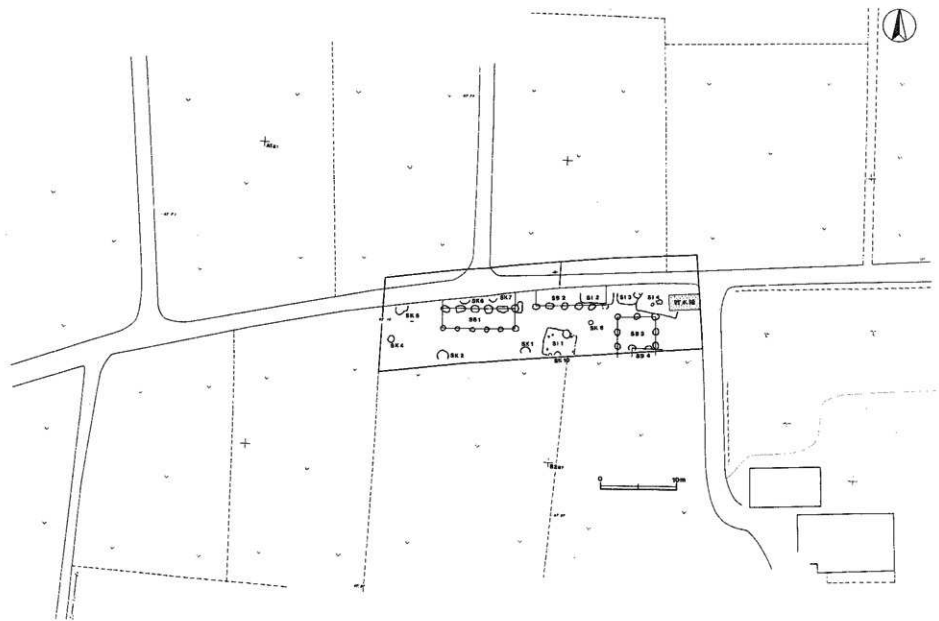
付図1 上入野遺跡遺構配置図



付図2 青木遺跡遺構配置図



付図3 後側遺跡遺構配置図



付図4 前側遺跡遺構配置図